

に酒に呑まるゝに至らざれば満足せず。此時に至りては酒の善悪も亦明白になりて、悪酒は口に適せず、益々強く良き酒に非ざれば満足せざるに至る。斯くの如く凡ての慾望は其の量の増加すると共に其の質も亦上進するを常とす。生存の慾望に於ても又然り。此の慾望漸く、強くなるに随ひ、人智は其刺戟をの受けて自ら之を満足せしめんと勉め、随つて人智上進すれば慾望も亦上進して、嘗に其の量に於てのみならず、其の質に於ても大に進化するに至る。斯くの如く慾望は人智を刺戟し、人智は慾望を上進せしむ。元來人は己れの現在の有様を以て足れりとするものにあらず、醜を得て罰を望むは、昔も今も人情の常なるが故に、現在に優りて多額の快樂と高尚なる快樂を得んことを望み、且つ此の慾望を満足せしめんが爲めに努力するは人の至情たるなり。野蠻蒙昧なる時代の慾望は下等にして肉體に關係するものゝみ熾んなれども、漸く人智の進歩するに従ひ、此の下等なる肉體の慾は一變して權力財産等の慾となり、再變して才能名譽等の慾となり、三變して美術道義等の慾となる。

世には慾望を以て一概に悪しきもの下等なるものゝ如く思惟する論者ありと雖、慾望は決して悪しきものにも又下等なるものにも非ず。人が天より票けたる性質にして、斯く増加し又上進したる慾望の満足は、是れ正に人が此の世に存在する目的にして、萬事萬物皆此の目的を成就せんが爲めに存在し、又實際此の目的に向つて進行しつゝあるものゝ如し。學術技藝は何の爲めに存在するや。人をして其の天性を發達せしめ其の幸福を全ふせしめんが爲めにあらずして何ぞや。道德は何の爲めに存在するや。善とは如何なる事にして、悪と異なる點は如何。善とは人の幸福を來たすと云ふ意にあらずして何ぞや。人は何故に正を取り邪を避けざる可からざるや。正は何故に正なるや、正なるが故に正なるか、將又人の幸福を來たすが故に正なるか。宗教とは何ぞや。宗教の目的は單に人が神を崇拜するに止まるか、何が故に人は神を崇拜するに至りしや。神は至正至愛なるが故に之を崇拜せざるべからざるにや、若し然りとせば、何が故に吾人は此の至正至愛なる神を崇拜せざるべからざるや、又實際崇拜するに至りしや。單に神を崇拜すると云ふが宗教の目的なりや、將又神を崇拜して人生の目的を全ふすると云ふが宗教の目的なりや。斯くの如く見來れば人生の目的は、先づ其の

慾望を出来るだけ完全の程度に迄發達せしめ、従つて斯く増加上進したる慾望に適當なる満足を與ふるに外ならず。故に或る意味に於ては、人智の進歩も、道德の發達も、又宗教の存在も、悉く人の慾望を上進せしめ又満足せしむる種々の方法たるに過ぎざるなり。

法則の發見と宗教の基礎

吾人は右に云ふが如き膨脹的なる生存の慾望を有するとし、此の慾望は惡しきものにも下等なるものにもあらずとし、又此の慾望は能く宗教の根本的基礎を組織するものなりとするも、未だ此の慾望は毫も宗教と云ふ分子を含有すると無し。さらば宗教的分子は如何にして人心に現はれ來りしや。今其の出現の状態を考ふるに畧左の如くなりしならんと思はる。

人が己れの慾望を満さんと企つるや、天地の種々様々なる妨害物現はれ來りて、其の進路を遮り其の希望を空ふせんとす。人智の幼稚なる時代に於ては、萬有の現象殆んど一として驚怪的恐怖的ならざるは無く、従て人の慾望に反し又幸福を害せしに相違なし。太陽の東より出つるや萬物は爲めに明白となり、其の西に没するや天地爲めに暗黒となるは實に驚くべきにあらずや。月の或は隠れ或は出て、或は盈ち或は虧くるも實に怪しむべきにあらずや。雲の空中を自由に往來し、又種々の形狀を呈するも奇にして、風の突然吹き到りて或は砂を飛ばし或は家を倒すも恐るべきにあらずや。電光の不意に天の一方より他の一方に閃き渡るも怪しむべく、雷鳴の轟々として耳を貫き天地を碎くが如きも怖るべきにあらずや。此の驚くべく怖るべき萬有の現象に對して、己れの幸福を全ふせんとする人類は、如何なる取扱を爲せしや。恐らくは彼等は斯くの如く危険にして恐怖すべき天然の現象に對して、之を恐れて成るべく此等の現象より遠ざからんとを務めしなるべし。若し遠ざかると能はざる場合に於ては、之に祈禱し之に供物して成るべく其の忿怒を静め其の好意を得んと務めしなるべし。斯くの如く自己の幸福を全ふせんとする慾望と、萬有の有害にして危険なる現象に對する恐怖との、衝突より生れ來りしものは是れ即ち宗教に外ならざるなり。人智の漸く進歩するに隨ひ、始めは奇怪なりと思はれしことの多くは今通常の事と

なり、始めは恐怖せられし天然の現象も今は恐怖せられざることとなりしならん。斯くの如く人智の進歩するに従ひ驚怪と恐怖の區域は漸く縮少し來るは明白なる事實にして、學術の進歩と云ふは即ち經驗的真理の發見の増加と云ふに異ならず。又經驗的真理の發見とは即ち天地の間に自然に存在する一定の法則の發見の増加と云ふに異ならず。故に此等の自然の法則の發見は、是れ即ち奇異或は恐怖の念を喚起し來れる天然の諸現象の減却と云ふに外ならざるなり。斯くの如くにして一方に奇跡的現象の減少と共に、他の一方には學術の進歩し來る事實を見る。人智の進歩は奇跡的現象の減少を來すものなると右に云ふ如くなるが、何故に人智は斯く進歩するに至りしや。是れ人が現在の状態に安んずる能はずして、より大に、より善き生活に達せんと欲するより、其の刺戟自ら智力の發達に及び、如何にかして此の怪しむべく又恐るべき天然の現象をも之を了解征服して、己れの幸福の爲めに利用せんと欲するに原因するにはあらざるべきや。斯くの如く人智の進歩は能く幸福の増進を促し、幸福の慾望は能く人智の進歩を促す。若し人智進歩して奇跡的現象の減却すると事實なりとすれば、人智の最も能く發達したる時に於ては、天然の現象は總て其の奇跡的分子を失ひ去るべきや。

抑も人智の進歩と共に天地間の所謂奇跡的現象が變化して自然的現象たるの實を現はしつゝあるは疑ふ可からざる事實にして、今日に於て多く其の證據を見る所なり。密に變化して自然的現象と爲りつゝあるのみならず、進んで人の幸福を増進する手段と爲りつゝあるもの少からず。是れ實に學術の名譽にして、此の變化は今より愈々著しかるべきに相違なし。學術の進歩するに隨ひ人類の宗教も亦大に變遷發達せざるを得ず、野蠻時代の宗教は決して今日の宗教にあらず。曖昧の人類が奇怪なり恐怖すべきものなりと思惟せし天然の現象は、必ずしも吾人に取りて等しく奇怪なるにわらず又恐怖すべきにも非ず。故に野蠻人の神として畏懼崇拜する萬有の現象を、吾人は皆に神と爲さざるのみならず、進んで單に萬有の自然的現象にして、人よりも劣れるもの若しくは人の幸福の爲めに存在するものなりと思惟するに至るなり。此點より考ふれば人智の進歩せざりし時代の宗教は、今日より之を見れば或は之を迷信と稱し得べく

或は之を無道理なりと云ふを得べし。サレド此等の宗教も嘗て一度は眞實なりと信ぜられ、當時の人心に満足を與へたるものにして、宗教思想が今日迄發達し來れる自然の、又必要の、段階なりしとを吾人は記憶せざる可からず。宗教思想は此等の必要なる段階を経て今日迄發達し來れりとし、今日の所に於て宗教は其の基礎果して確實なりと云ふを得べきや。今日吾人が眞理なりと信ずる所の宗教思想も、他日今少し進歩したる時代より之を見る時は、迷信若しくは無道理となり果つるものには非ざるべきや。今日の所に於て萬有の奇跡的現象が漸く減少しつゝありとすれば、如何にして宗教は此の學術旺盛の時代に生存し得べきや。宗教の喚起者たる奇異なる又恐怖すべき萬有の現象が滅却しつゝある時代、若しくは遂に消滅し去るべきを信ずる時代に於て、宗教は能く存在を企ふし得べきや。今日に存在する萬有の奇跡的現象も皆到底自然的現象たるべきを要求する時代に於て、宗教は能く存在し得べきものなりや。若し存在し得べしとすれば此の宗教の性質は果して如何。

入智進歩せる今日に於て萬有の所謂奇跡的現象の減少しつゝあるは明なる事實なり。

此の事實と共に古代の宗教の重なる喚起者なりし驚怪と恐怖の念の滅却しつゝあるも亦争ふ可からざる事實なり。斯くの如く一方より考ふれば宗教は其基礎漸く脆弱となり遂には滅亡し果てんとするもの、如く思はる。然れども萬有の奇跡的現象の滅却は、決して眞正なる宗教の基礎を脆弱ならしむる者に非ず。如何に學術が進歩すればとて、又其の進歩が如何に奇異恐怖の念を滅却し去ればとて、學術は單に萬有の現象を研究して其法則を發見するに止まるのみ。學術は決して此等の現象又法則を創造し得るものに非ず、單に既に存在する萬有の現象を研究して、既に其間に存在する法則を發見するのみ。故に學術の進歩に依りて彼れ此れ個々の怪しく恐ろしき現象は消滅すべけれども、他の現象と其の法則とは決して消滅するの憂あること無し。此等の一定せる法則は如何にして出で來りしや、此等の法則を有する萬有の現象は如何にして起り來りしや。是れ實に吾人に取りて最も奇にして最も驚くべき事に非ずや。古代の所謂奇跡的現象に優りて此の自然的現象は實に怪しむべく驚くべきものたるなり。學術の進歩して萬有は法則の萬有なること明かになるに隨ひ、萬有と其の原因に對する吾

人の嘆美は常に増加しつゝあるを覺る。何が故に萬有は斯の如く秩序あるや法則あるや、如何にして萬有は今日の如く美に富めるものに進化し來りしや。何が故に萬有は能く人智の了解する所と爲り、又人に征服せられて能く人の幸福を増加し得るものなりや。斯く考へ來れば吾人は萬有に對して實に奇異の念(Wonder)と嘆美の念(Admiration)と感謝の念(Gratitude)と敬虔の念(Reverence)とを感ぜざるを得ざるなり。是れ即ち宗教にあらざして何ぞや。サレハ宗教は決して學術と衝突すべきものにはあらざるなり。嘗に衝突せざるのみならず、宗教は學術の爲めに強められ又助けられて、愈々高尚なるものと爲り得るものなり。學術を離れて宗教は決して完全なること能はざるべく、又學術は宗教を離れて決して其の目的を遂ぐることを能はざるべし。元來學術の目的は人をして智識を發達せしめ、其の存在の目的を全ふせしめんとするに外ならず。宗教の目的も亦人をして此の天地の間に處して、安心立命を得せしめんとするに外ならず。サレバ此の二者は決して相衝突すべきの道理あること無し。寧ろ宗教は學術の進歩を促し、學術は宗教の性質を高尚ならしむべきものなり。故に所謂奇跡的現象の消滅如何は毫も真正なる宗教の存在に害あること無く、却て其出現と發達とを促すものたるに過ぎざるなり。

生存の慾望を妨害するもの

以上は先づ人類は能く總ての妨害物を征服利用し得べしとして論じたる所なるが、此等の妨害物は果して能く斯の如く征服利用し得らるべきものなりや。人が多くの慾望を有すると、此等の慾望が常に増加し進しつゝあると、又此等の慾望が望み通りに満足せられ得ずして夥多の妨害物に出會すると等は、争ふべからざる事實なるが、此等の妨害物とは果して如何なるものなりや。乞ふ少しく之を論ぜしめよ。人が慾望を満足せしめんとするに當り妨害となるもの極めて多し。されども此の多くの妨害物は先づ之を二種に大別するを得べし。第一種は天然の現象即ち自然の境遇より起る妨害物にして、第二種は人性若しくは人間社會より起る妨害物なり。今此の二種の妨害物に就て其の重要なものを左に列記すべし。

第一は、天災にして、タトヘ旱魃、霖雨、暴風、落雷等、一として人の幸福を害し

又人をして恐怖を感じせしめざるはなし。此等は凡て人をして自ら己れ以上の者に依頼するの念を起さしむるものなるが、又之と同時に奮つて此等の妨害的現象に打ち勝つ精神をも惹き起さしむるものなり。

第二は、地變にして、地震、洪水、饑饉、火山の破裂、船舶の難破等、是又一として人を驚かし其の幸福を害せざるはなし。

第三は、諸種の疾病にして、其中には人の罪惡に基つくもの決して少からずと雖、自然に存在する疾病の多きとは、曾て罪惡を犯すと無き鳥獸の間に種々の疾病あるを以て之を知るべし。而して疾病の人に苦痛を興へ又不幸を來すとは、今更茲に之を言ふに及ばず。

第四は、老死にして、人畜共に之を免かるゝを得ざる所のものとす。老死を以て罪惡の結果なりと爲す論者有りと雖、罪惡無き者にも死は能く其間に行はれて、昔より今日に至る迄苟も生物と名の附くものにして一つも老せず又死せざるものは無し。而して老と死が老死者及び其の親族に來す色々の悲哀と損耗とは、是れ實に人生行路難の重なるもの、一なるべし。

第五は、離別にして、離別の中には人の罪惡より起るものあり、又之に關係無くして起るものあり。假令は日清戦争に關して之を考ふるに、幾多の老人は其杖として頼める息子を取られて苦しむものあるべし。或は新婚日猶ほ淺きに、夫の遠征に遇ふて一方には其の起居を案じ、又一方には孤衾を嘆ずる妻あるべし。或は父兄を取られて現在衣食に苦しむつゝある者、若くは斯く迄に至らずとも、種々の不都合を被むれる子弟も亦多かるべし。會者常離の世の中とは云へ、人誰か離別に遭ひて苦の甚だしきを感せざるものあらん。

第六は、貧窮にして、之か爲めに苦しむ者天下其人實に少なからず。世間の罪惡の多分は皆是れ貧窮の結果にして、一方より考ふれば實に斟酌すべき事情有るものなり。子は饑に泣けども糧に一粒の米無く、寒膚を衝けども覆ふべき衣服無しと假想せよ、斯くの如き人は如何にして其存在の目的を遂げ其幸福を全ふし得べきや。而して現に多くの同胞は實に此の如き困苦の中に呻吟するに非ずや。而して貧窮は皆に貧窮者に

苦を興ふるのみならず、貧窮ならざる人にも亦苦を興ふるものなり。人は自然に同感同情の性を有するが故に、他人の苦しめるを見れば、如何に己れに美味美服有りとするも、決して心誠に快樂を感じると能はざるものなり。

第七は、我儘勝手若くは利己主義にして、或る一人の我儘勝手は皆に直接に多くの同胞を貧窮に苦しめ、不快の中に沈ましむるのみならず、又間接には己れ自らの眞正なる幸福を害し、己れを神の高級地位より畜生の低き地位に迄墮落せしむるものにして、是れ實に吾人の間に數多き事實にあらずや。試みに彼の高利貸なる者を見よ。斯くの如き我儘勝手を主義として他人の幸福を顧みず、又己れの品格を顧みざる人の存在は、慥かに人間全躰の幸福に有害なると論を待たず。

第八は、壓制殘虐にして、昔より今日に至る迄、幾何の良民は壓制の爲めに塗炭に沈淪せしや、又幾多の貴ぶべき人間は殘虐の犠牲と爲り果てしや。記憶せよ、如何に多くの同胞は、此の歴しき太陽の光線をも受けず、新鮮なる空氣をも吸ひ得ずして、極めて寒きサイベリヤの鐵坑の中に殆んど泥鼠か若くは鼯鼠の如く呻吟的生涯を送りつゝあるかを。

第九は、戦争なり。生存競争と優勝劣敗とは是れ生物界の原則にして、弱肉強食と云ふが如きも決して下等動物の間に於てのみ行はるゝにはあらず、正さに人類の間に於て實際に行はれつゝあるを見る。野蠻未開の時代は暫らく之を措き、有史以後のみに就て考ふるも、今日に至る迄社界に現はれ出たる戦争の數は果して若干ぞや、大なるものも百を以て數ふべく、小なるものに至ては千は愚か萬を以ても數ふべからず。此無數の戦争の爲めに死傷せし人と、之が爲めに害せられし財寶は如何。又此等の死傷者が受けし苦痛と、彼等の親族朋友が之が爲めに爲せし心配は如何。

第十は、煩惱の苦しみなり。元來慾望の悪しきものにあらざることには己に前に論せるが如し。慾望有りてこそ始めて人は己れの存在を欲するものなれ、又幸福を増進せんと願ふなれ。一朝人心より慾望を取去らんか、人は恰も石の如く冷に又頑なる者と爲り果つべし。蓋し慾は人の原動力なれば人心より之を取り去るは、恰も蒸氣機關より其原動力なる蒸氣を取り去ると一般なればなり。斯くの如く慾は適當なる範圍に於て

は全く善きものなるも、一たび此の範圍を超え、自らを恣にするに至れば、人は徒らに慾の奴隸となりて慾の爲めに使役せらるゝに至る。茲に於てか慾は愈々猖獗を極め、遂に心は慾の巢窟若くは戰場と化し去るべし。心一度斯くの如く錯亂するに至れば、其の結果は心中非常の不和と苦痛ならざるを得ず。慾の爲めに來たされたる此の錯亂と苦痛とは是れ世の所謂煩惱にあらずして何ぞや。而して此の煩惱の爲めに苦しむもの天下殆んど皆然り。

第十一は、諸種の罪惡と之に伴ふ苦痛にして、一たび人心に煩惱の生じ來りて、或は金の慾、或は色の慾、或は權力の慾、或は名譽の慾の其自然の範圍を超え自らを恣にするに至れば、其慾は遂に或は思想に或は行爲に現はれて所謂罪惡と爲り、一方には同胞に多くの困難と損害とを蒙らしめ、他の一方には己れの幸福を害し己れの苦痛を増すものなり。而して己れが受くる苦痛は、之を間接に直接の二種として考ふるを得べし。間接の苦痛とは例令ば罪惡の爲めに自ら被むる貧窮疾病離別幽囚等の謂ひにして、直接の苦痛とは自らの心に感ずる心中の不和即ち良心の譴責なり。此の譴責が如

何に嚴重なるや、又如何なる絶對的の勢力を有するものなるやは、屢々己れの罪を役所に自首し出づる人あるを以て之を知り得べけん。此等の人々は罰金牢獄若しくは死刑の恐を以ても能く己の良心の譴責を抑へ得ずして、廣き天地の間に五尺の短身を置くの餘地すら之れ無きが如く感ずるなり。此の心中の不和即ち良心の譴責は苦痛中の苦痛にして、或意味に於ては慥かに人間の幸福を害するものと云ふを得べし。吾人は此の良心の譴責が人間の發達に必要な事と、又此の譴責が人間の幸福に害あるが如く思はるゝ事とを如何に調和し得べきや。

第十二は、無事に苦しむ無爲の苦是れなり。貧窮なる人は貧窮に苦しみ、疾病ある人は疾病に苦しむ。サレば健全にして高貴なる人は何を苦しむや。俄かに見る時は此等の人々は殆んど苦しみを知らざるものゝ如く思はる。然れども人各固有の苦ありて、細かに見來れば一人として苦無きものは有ること無し。人に依りて苦に多少の差は有りなん、決して絶對的に苦無き人は有ること無し。乞食の生涯と帝王の生涯と樂は何れが多き、苦は何れが少なき、是れすら決して容易に判じ得べき事にあらざるなり。

泰西の或る哲學者は「苦の量」と云ふ句を用ひて、人には各苦の定まりたる量ありて、何人も己れの量丈けの苦は常に之を有するものなりと云へり。固より此量の大小は人に依りて差ありと雖、各人の固有量は常に其の人相應に満されつゝあるなり。非常なる心配の起りし時は、其時に限りて苦の量も亦非常に増したるが如く思はるれども、其實平日に於ても同量の苦有るに相違なし。唯平常は余り心配するに及ばざる多くの事を心配しつゝあるにて、非常の時には其一事のみに注目するが故に、苦の量も亦非常に増したるが如く覺ゆるのみ。斯の如くにして人各々己れ固有の量丈けは必ず苦しまざるを得ざるものなるが故に、積極的の苦を有せざる人は勢ひ消極的の苦即ち無事に苦しむの苦を以て此量を充さざるを得ざるなり。消極的即ち無事の苦が如何に積極的即ち多事の苦に優りて甚しきやは、サイベリヤの或る暗黒なる地窖に呻吟する囚人が無事に苦しむの餘り、毎日幾度も縫針を地上に投じ、僅かに洩れ来る光線の助けに依り、之を探り集むるを以て、鬱散の唯一の方法となすの一例を以ても之を知り得べけん。而して斯くの如く無事に苦しむと云ふことは果して吾人の間には之れ無きや。

隠居食客等は皆此の種のものには非ずや。吾人は決して常に無事に苦しむものならずとするも、誰か一日の中一年の中若しくは一生の中に、屢無事の苦を實驗せざるものあらんや。此の無事無爲の苦は實に人間の生涯に取りて大なる關係を有するものにして、一方には諺に「小人閑居して不善を爲す」と云ふが如く人を罪惡に陥らしめ、又他の一方には人をして幽鬱病に罹らしめ、若しくは自殺を企てしむるに至る。此の無事の苦を癒す適當なる方法はこれ無きや。人生の幸福を全ふするには必ず斯かる方法無かるべからず。

此等妨害物の利用

予は右の如く、自然現象より又人間社會より起り來りて、人が己れの幸福を全ふせんとする慾望の満足を障礙する諸種の妨害物を研究し來れり。既に此等の妨害物の存在が事實なりとすれば、天地の間に棲息する人類は、如何にか之に對する處置法を講究せざるべからず。昔より之れが爲めに案じ出されたる處置の方法は先づ三ありと思はる。

第一、隱遁主義即ち勉めて此等の妨害物を避易する方法にして、一言に云へば「當らぬ神に祟り無し」を以て主義と爲すものに外ならず。故に此の方法を取る人々は、成るべく人事を避け山間に隱遁して、風月を侶とし天然を楽しむとを是れ務む。

第二、不動主義即ち無感覺を主義とする方法にして、此の方法を取る人々は哀樂悲喜の上又外に立ちて、其の支配を蒙らざらんとを務む。故に彼等は必ずしも隱遁を事とせず、寧ろ困難の中に在りて困難に無感覺となり、妨害の中に在りて妨害に無頓着ならんとを是れ務む。

第三、隱遁主義にも非ず又無感覺主義にも非ず、云はゞ利用主義にして、此等の無數なる妨害物を利用して人が幸福に達する階段と爲さんと欲するものなり。故に此主義を取る人々は第一と異なりて、妨害物に富む天然と、同じく妨害物に富む社會との間に居を占めて、却て此の天然と此の社會とを改良進化せしめんとを務む。又第二と異りて、此等の妨害物に對して徒らに無感覺にならんとを務めず、進んで哀を樂に換へ悲を喜に變ぜしめんとを務む。前二法は共に萬有と社會とに各々固有の目的あるを認

めず、又萬有と社會との間に普通の目的あるとを認めず、又此等の所謂妨害物が其實文明進歩の必要なる媒介者たることを認めざるものなり。之に反して第三法は能く萬有の目的、社會の目的、及び萬有と社會との間の普通の目的等を解し、又進んで凡て此等の妨害物が人間進歩の爲め必要なる媒介者にして、能く之を利用すれば、「蹶き石を變じて踏み石と爲す」を得べしと信じ、勉めて此等の妨害物を利用せんとす。而して此等三法の中昔より人類の多數が實際に取りつゝ今日に至り、又今日に於ても取らんとを欲しつゝあるは、第三の利用主義に外ならざるなり。

既に人類の多數は、内外より襲ひ來る凡ての妨害物を利用して、反つて此等を己れの幸福を全ふるの方便若しくは段階たらしめんと欲す。是に於て乎、此の慾望心は自ら人智を刺戟して終に學術は今日の如く進歩し來れり。而して學術の進歩が如何に萬有の奇跡的現象をして自然的現象たるの實を露はさしむるやは、略前に之を云へり。故に今此處に於て研究すべき問題は、學術の進歩するに従ひ人智は終に右に擧げたる凡ての妨害物を征服利用し得べきや否や、即ち是れなり。既に此等の多くの妨害物の

中には、嘗に今日に於て未だ利用すると能はざるものあるのみならず、到底全くは征服すると能はざるものすら少からざるに非ずや。人は遂に凡ての天災地變より能く安全なるを得べきや。總ての人は能く疾病貧窮等を悉く免かれ得べきや。又能く離別の苦煩惱の愁等を脱し得べきや。或は能く全く不老不死の境に達し得べきや。此等の點に於て吾人は實に疑無き能はず。人は元來其智に於ても其力に於ても限り有る者なれば、決して無限の智若しくは無限の力を得んとは、人が人として生存する間は、到底望むべきとに非ず。随つて無數にして常に増加上進しつゝある欲望を全く満足せしむるとは難かるべし。サレバ人が幸福を全ふせんとするに當りて、或る種の妨害物は常に其の進路を遮りて横はるを免かれざるなり。此の妨害と欲望との衝突は、其の永續する限り何時迄も、人をして萬有の本躰即ち神を求めしめ、之に向はしめ、之を記憶せしめ、又之を崇拜せしむべし。或人は曰はん、人の目的は遂に完全なる域に進むに在り、人一人は此の域に達せば、其の時には宗教は自から消滅すべし、是れ此の時に於ては總ての妨害物は最早存在すること無ければなりと。然り人の目的は完全の域に

達するに在り。然れども人の達すべき完全は、決して絶對的の完全に非ず。單に人の完全にして、神の完全には非ず。單に完全なる人と爲るに在りて完全なる神と爲るには非ざるなり。故に如何に人が發達するも、決して其故を以て宗教の不要なる時代に達し得べしとは云ふ可からず。元來有限なる人は決して無限の域に達し得べきものにあらず。是れ蓋し有限は如何にするも、決して無限となり得ると能はざればなり。故に嚴に之を云へば、未來永劫人は決して絶對的に完全になり得べきものに非ず、唯常に益々完全に向つて進行して止まざるべきのみ。既に人がヨリ完全に向つて常に進行すと云へば、吾人は人の常に不完全なることを承認するものにあらずや。

人は元來下等動物より進化せしにせよ然からざるにせよ、下等動物の有するが如き多くの下等なる慾望を有するものにして、又た此等の慾望は實に他の高尚なる慾望に優りて強きものなり。力より云ふ時は、此等の下等なる慾望は心中に於て最も強き分子にして、動もすれば總て他の高尚なる感情慾望等を抑壓撲滅せんとするの傾向あるなり。加之此等の下等なる慾望は、恰も雜草が境遇の如何に係らず能く生長繁茂するが

如く、種々の高尙なる欲望に取りては有害なる事情をも能く利用して、猖獗を極め易き傾あり。然れども人には生れながらにして欲望の高下を辨ふる力あり、又下等なるに優りて高尙なるを慕ふの性あり。且つ高下二種の欲望が相衝突する場合に於ては下等なるを退け高尙なるに従はざる可からずと感ずるの道義心有るが故に、成るべく下等なる欲望を避けて高尙なる欲望を取らざれば、又之に向つて進まざれば、止まざるの天性あり。故に種々の妨害物に逢ふて之れに勝ち得ざる時、若しくは高尙なるを退け下等なる欲望を恣にせる場合に於ても、尙ほ能く己れの足らざるを感じ若しくは爲す可からざる事を爲せしを感ずるなり。此の苦しき感情即ち良心の譴責は、一方より之れを見るときは或は人の幸福を全ふせんとするを妨ぐる妨害物の如くに思はるれども、他の一方より見れば、其の實人をして下等動物の如き區域を離れ神聖とふ地位に至らしむる惟一の原動力或は教導者にして、之れ有るが故に人は能く道徳的動物となり、仁愛を解し禮義を重んずるとを得るなり。故に吾人は謹んで妨害の如く見ゆる此の良心の譴責を利用して、完全なる人となるの踏み石たらしむるを要す。而して之

を爲すには吾人は努めて良心の譴責に會はざる様、即ち心に欲望の高下を悟り高尙なるもの、取らざる可からざるを感ずるに當ては、従順に此命令に従ひ下等なるを退け高尙なるを取らざるべからず。是れ良心の譴責の利用法にして、又所謂妨害物が存在する目的に外ならざるなり。斯の如く吾人は常に良心の命令に従ひて下等なる欲望を避け高尙なる欲望に従へば、皆に自ら省みて己れに耻づる所無く又従つて良心の嘉納を受くるのみならず、終には人の達し得へき完全に達し最高最大なる幸福を受け得べし。斯の如くにして良心は能く吾人を導きて下劣なる肉慾の生活より神聖なる靈の生活に達せしむるなり。

或人は曰はん、吾人若し常に良心の命令に従ふ時は、良心の譴責を蒙むるゝ無きが故に、遂に道義の絶對的命令者なる神を忘れ、従つて宗教も亦全く忘却せらるゝに至るべしと。如何にも良心の譴責は斯の如き場合に於ては消滅すべし。是れ譴責すべき事あらざればなり。然れども良心の譴責が消滅すればとて神造も併せて忘却せらるゝとは有らざるべし。良心の命令とは高下二種の欲望の相衝突する場合に於て、高尙なる

は取るべく下等なるは取るべからずと絶對的に感ずる事に過ぎざれば、良心の命令は良心の譴責とは自ら別物にして、人の人たる間は決して消滅し去る憂之れ有らざるべし。善は爲すべく悪は爲すべからずとの此命令的感は、其起原の如何に拘らず、實に一種格外なる感じにして、快樂説を以ても又進化説を以ても、決して満足に説明し得べきものに非ず。此感じは凡ての人をして常に人間以外の又以上の道義的命令者を想起せしむるものにして、此感じのある間は人は必ず此命令者即ち神の事を思ひ止まると能はざるべし。故に此方面より論するも、吾人は宗教が決して人間の慾望の進化和共に滅亡すべきものにあらざるとを知る。否、吾人は嘗に滅亡すべき者にあらざると知るのみならず、進んで宗教は人を完全の域に誘導して以て真正なる幸福を受けしめんとするものなることを知る。

宗教の基礎に關する諸説

古來より學者が宗教の基礎として提出せる諸説を研究すれば予が以て宗教の基礎と思惟する所のもの、性質も自ら明白なるべしと信ずるが故に、今より此等の諸説の中に最も重要なものを左に掲げ出して、之れが批評を試み以て予の説と異同する所を示さんと欲す。

(一) 天啓説

第一種の學者は、宗教の基礎を以て天啓(Revelation)に在りと爲す。即ち宗教は神が己れの存在と性質とを人に啓示したるに原づくものにして、人は此の啓示を経て後初めて神の存在を知り神の崇拜すべきものなるを悟り、随つて宗教なるもの世に顯はれ出でたりと爲す。此説は重もに基督教徒の間に行はるゝものにして、真正の宗教は單に基督教のみなりと信じ、凡て他の宗教を以て迷信則ち偽りの宗教なりと見做す者の説なり。基督教は果して唯一の真正なる宗教なりや、他の宗教は凡べて偽りの宗教なりや。吾人は斯の如く信ずると能はず。眞理は基督教の專有物に非ず。孰れの宗教か多少の眞理を有せざらん。基督教徒のみ神の子には非ず。寧ろ迷へる小羊即ち異邦人は、迷はざる基督教徒に優りて神の愛子には非ずや。宗教を眞偽の二種に類別するは、到底今日に於て維持し得べき分類法には非ず。故に基督教のみを以て真正の宗教なり

惟一の默示なりと爲すの説は、既に破壊し果てしものとして、サテ宗教は果して天啓に原づくものなりや否やを研究せん。

基督教に限らず、天下總ての宗教は、悉く天啓を以て其の基礎なりと唱道するものなり。抑も天啓とは果して如何なる事を謂ふや。神が其の形を現はし口を開ひて、人に己れを示し又教を垂れしとの謂ひか。十九世紀の今日に於て、斯の如き古風の天啓説を文字通りに受け取る人は、學者の間には殆んど之れ有るべしとは思はれず。サラバ神は如何にして默示を垂れしや。天變地妖を利用して、間接に人心に畏懼依頼の念を生ぜしめしにや。或は不思議なる靈魂上の法則に依りて、直接に人心に神を知り神を拜する端緒を開きしにや。二者其一に居らざるべからず。甲乙孰れの説を取るも、神が己れを人に示す前に、人には既に神を知り神を拜する元來の天性あると認めざるべからず。若し此の自然の傾向なかりせば、如何に神が天然の現象を利用し、又直接の靈魂上の刺戟に訴ふるも、到底人は之を悟ると能はずして、神の辛苦は遂に徒勞に歸せざるを得ざるべし。恰も猫に小判を與へ、豚に眞珠を投ずるが如けん。サラバ天

啓を以て宗教の基礎と爲す説は、一方に於て、事實上神が自らを示すと云ふとの甚だ疑はしき事なるのみならず、又他の一方に於ては理論上遂に何故に人が能く此の天啓を悟り宗教を有するに至るやを説明し能はざる説なり。

(二) 未來の信仰説

第二種の學者は、宗教の基礎を以て未來の信仰(Belief in Future Life)なりとなす。人が未來の信仰を有し死後の心配を感ずる以上は、宗教は必ず存在を維持し得べく、此の基礎の不變不朽なる限り宗教も亦不變不朽なるべし、天下到る處未來の信仰を有せざる人種無く、又此の信仰無くして存在し得べき宗教無しと論ず。此の説に就て考ふるに、先づ批評すべきは、未來の信仰と宗教とが果して斯の如き親密なる關係を有するやの一事なり。歴史上未來の信仰に淡泊なる宗教あるは、今日に於て學者の疑はざる所にして、古代の宗教は何處に於ても重もに現世的のものにして、決して専ら來世的のものに非ず。例令ば古代の猶太教の如き、又我國古代の神道の如き即ち是れなり。又理論の上より考ふるに、例令吾人の靈魂は此世のみにて滅亡するものなりとする

も、此故を以て直に宗教の基礎は滅亡し盡せりと論ずべからず。宗教を以て専ら未來の事に關係するものとなせば或は然らん。然れども宗教は神と人との關係なれば、人が人として續き、萬有が萬有として存する間は、靈魂の朽不朽如何に拘はらず、少くとも此世に於て宗教の存在を必要とするなり。故にカントの「宗教は未來の信仰無くして存在し得る者に非ず」と云へるは、假令カントの威光を以てするも、吾人の首肯すると能はざる所なりとす。

次に批評すべきは、若し假りに未來の信仰を以て宗教の基礎なりと認むるとするも、吾人は一步進んで、何故に未來の信仰は能く宗教の基礎と爲り得るやを明かにせざる可らず。何故に人は未來を信ずると同時に宗教を信ずるに至るや。單に未來を信ずるが故に宗教を信ずると云ふのみにては、到底吾人の理性は之に満足すると能はざるなり。吾人は何故に未來を信ずるや、又何故に未來を恐るゝや、又何故に未來を恐るゝの恐は能く吾人を導きて宗教を信ぜしむるに至るや。斯の如く深く理由を究め來れば、未來の信仰若しくは未來の恐怖を以て宗教の基礎と爲す説は、未だ宗教の根本的基礎に達し得ずして、中途に彷徨するものと云ふ可し。此説は、一方には未來の信仰の必ずしも宗教に必要ならざる不都合あり、又一方には何故に未來の信仰が宗教の基礎を形造り得るやを説明し得ざる欠點あり。

(三) 依頼心説

第三種の學者は「依頼心(Feeling of Dependence)を以て宗教の基礎となす。此世に生れ出で、より人の存在と幸福とは一として依頼に基づかざるはなし。幼にしては父母に依頼し、老ひては子孫に依頼し、食ふにも衣も住むにも、一として外物に依頼せざるを得ず。肉體は其存在を動植物に依頼し、動植物は其存在を地球に依頼し、地球は其存在を幾多の星宿に依頼す。地球は萬有に比すれば恰も九牛の一毛の如く、人は地球に比して恰も大海の一滴の如し。又人の生涯は之を無始無終なる永劫に比ぶれば、恰も朝に生れて夕に死する蜉蝣の生涯の如く、又永遠の過去と永遠の將來との間に於ける、極めて短かき一鏈環の如きのみ。吾人の知る所は唯僅かに無限なる鏈環の一小部分にして、其の始めをも知らざれば又終りをも知らず。吾人の生涯は暫く顯

はれて消ゆる朝霧の如く然り。吾人が智と力に於て共に己れの孱弱有限なるを悟り、自ら外界の萬有に依頼し、又た不變不動なる萬有の本體に依頼するは實に當然の事なり。故に此の自然に備はれる依頼の感情を以て宗教の基礎と爲すは、随分道理に適へる説なりと云ふ可し。

然れども茲に此の説に就て問ふべき問題一あり。何故に人は外物に依頼するや、人を以て萬有若しくは萬有の本體に依頼せしむる動機は何者ぞや。此の動機微りせば、人は如何に己れの智と力との弱くして又限り有ることを知るも、外物に依頼するとは必ずべからず。此の動機は果して何ぞや。依頼心を以て宗教の基礎と爲す論者は謂ふ可し、人が外物に依頼するは其心に恐怖を感じればなり、即ち依頼心の基礎は恐怖心なりと。若し論者の此の言をして真ならしめば、宗教の基礎は依頼心と云ふよりは、寧ろ恐怖心と云ふの優れるに如かず。吾人は恐怖心を以て能く宗教の基礎と見做し得可まや。元來何故に人は恐怖を感じるや、人が恐怖心を懐くに至る理由は如何。或人の曰ふが如く、恐怖心は先天的に人心に備はれる感情なりと爲す可きか。曰く然り、恐

怖心は先天的のものなるに相違なし。然れども此の恐怖心は如何にして宗教の基礎となり得るや。恐怖心が先天的なりと云ふと宗教が恐怖心に基づくと云ふとは決して同一にあらず。先天的の恐怖が宗教心喚起の最始動機たるとは吾人も亦同意する處なれども、此は起原にして基礎にあらず。宗教は恐怖心によりて始まる、然れども宗教は恐怖にはあらず。予を以て之れを見れば、人が不可思議にして危険なる萬有の現象に遭遇し、或は己れの孱弱有限なるを衆生の轉變無常なるを覺悟して、或は恐怖の念を起し或は依頼の心を生ずるには、依頼心の奥に又恐怖心の奥に、生存の慾望有るが故なりと思はる。此の慾望微りせば、恐怖心ありとも依頼心ありとも、此等は決して宗教の基礎とはなると能はざるべし。故に予は依頼心若しくは恐怖心よりも、生存の慾望を以て宗教の基礎と爲すの適當なるを主張するものなり。

(四) 知無限説

第四種の學者は、智識殊に神を知る事(Knowledge of God)を以て宗教の基礎と爲す。此の説を取る學者の中には種々異なる見地に立つものあり。或學者は、感情(Feel-

目)を以て、劣等動物も亦之を有するが故に、卑劣なるもの、如く思惟し、随つて智識を重んずると甚しく、智識の中に於ても萬有の本體を知るとを以て最も大切な事とし、此の智識を以て宗教の基礎と爲す。萬有は智(Intellect)の顯現にして、宇宙の歴史は智の顯現の發達の歴史なり。此の智即ち萬有の本體を知る、是れ宗教の基礎なりと論ず。又或學者は、宇宙の本體を以て無限者(The Infinite)なりとし、之を知るの智識を以て宗教の基礎なりと爲す。天然の現象も能く人をして此の無限者の存在を知覺せしめ、又人生の經驗も亦能く此の無限者の存在を覺知せしむ。外を見ては吾人は美麗の無限又法則の無限等を知り、内を顧みては恩愛の無限又は義務の無限等を悟る。斯く無限を知るは、是れ宗教の基礎なりと。又或學者は、萬有の本體を以て不可思議なる者(The Unknowable)と爲し、此の者の不可思議なることを知るは、是れ宗教の基礎なりと爲す。此の勢力は元來不可思議なるものなるが故に、之を知悉すること能はざるは勿論の事なるが、人が一度其の不可思議なる事を知るに至れば之を尊び之を畏るゝに至るべし。斯の如くにして、此の不可思議なる勢力を知ることには是れ宗教の基礎を形造るものなりと。

此等の諸説は各々多少相異れりと雖、智識を以て宗教の基礎と爲すの一點に於ては凡て相同じ。此の智識を以て宗教の基礎と爲す説は、前説と同じく多くの眞理を含蓄するに相違無し。或種の智識無くして能く存在し得べき宗教は之れ有らざるべく、又た進歩せる宗教に、進歩せる智識の必要なるは論を待たず。サレドモ智の働きのみが能く宗教の基礎と爲り得べきや。宗教は單に智識のみより組織せらるゝものには非ずして、寧ろ重なる成分は情と意との働きの非ずや。何故に人は不可思議なる勢力を尊敬するに至るや、又無限的存在者を崇拜するに至るや、已に尊敬と云ひ崇拜と云へば是れ智識のみの事には非ざるにあらずや。如何なれば此の智識は單に智識に止まらずして、進んで宗教出現の機會と爲るや。必ず相當の理由無かるべからず。或人は曰はん、智識進歩すれば、人は萬有の本體の存在する事と其の惟一なる事とを知るに至る可く、随つて此の存在者を認識するは是れ宗教其者なりと。サレドモ何故に人は萬有の本體を認識するに至るや。又其の惟一なる事を推知するに至るや。是れ人に智識の

進歩を慾望し、又萬有の歸一を慾望する性質有るが故にはあらざや。元來智識は智識の慾に驅られて進歩するものにして、吾人は智識の奥に慾望、殊に智識歸一の慾望の存在を認めざるを得ず。故に智識を以て宗教の基礎と爲すは、未だ以て満足なる説明とは云ふ可からず。

(五) 道義心説

第五種の學者は、道義心を以て宗教の基礎なりと爲す。人智は萬有の本體を知り得るとするも知り得ざるとするも、人心には此の智の働の外に一種特別なる道義心即ち絶對的命令(Categorical Imperative)なるものあり。是れ吾人の嗜好の如何に拘はらず、又行爲の結果の如何に拘はらず、善は爲すべし惡は爲す可からずと絶對的に命令する者にして、此の命令の絶對的なるが故に、吾人は自ら此の命令の奥に命令者の存在するを信じ、此の命令者を敬し之を畏る。此の絶對的命令こそは是れ宗教の基礎なりとの説是れあり。此説も亦多くの眞理を含蓄するものにして、吾人が善惡の區別を知り、善の爲すべく惡の爲すべからざるを感ずるは、如何にも不思議なる心的現象にして、

單に快樂説を以ては決して説明し盡さるべきものにはあらず。假令善惡は利害に基づくものにして、善行とは己れ及び公衆の幸福を増進するものなりとの説をして眞ならしむるも、吾人は尙ほ問ふを得るなり、曰く、何故に幸福を増進する行をば之を善なりと感じ又之を爲さざる可からずと感ずるやと。此の問題の説明せられざる限りは、吾人は道義心を以て、我れ以外又我れ以上の道義的命令者の命令なりと思惟して、何の不都合か之れ有らん。

唯此の説が今一步進んで、根本的に宗教の基礎を説明せざるは吾人の遺憾とする所なり。何故に吾人は善を爲さざる可からざるか、又惡を爲す可からざるか。吾人は到底此の問題に關して説明を附す能はざるか、或は元來說明無きものか、若しくは當然の理由ありて然るか。吾人の理性は善は善なるが故に善なりと云ふを以て能く満足し得べきものなりや。吾人は何故に善をば爲す可しと感じて、惡をば爲す可しと感ぜざるや。如何にか之が説明を爲されば、吾人は到底満足すること能はず。たとへ吾人は何故に幸福を來す行ひを以て善行なりと感ずるやの理由をば之れを説明し得ずとする

も、善は即ち幸福を來すが故に善なりと説明するに於て、毫も不可無しと信ず。若し幸福を以て善惡の基礎なりとすれば、吾人は能く何故に善を爲す可しと感じて惡を爲す可しと感ぜざるやの理由を説明し得べし。既に幸福を以て善惡の基礎なりとすれば、是れ正さに人生の慾望即ち幸福の慾を以て、道義心の基礎と爲し又宗教の基礎と爲すに異ならず。吾人は固より善惡と利害とを混同する者には非ず、又快樂と道義とを顛倒するものにも非ず、何處迄も正善の神聖を主張し、道義心の犯す可からざるものなるを唱道する者なり。サレド道義心の基礎を論ずるに當りては、之を幸福の上に置くものにして、隨つて宗教の基礎をも亦た幸福の欲望の上に置くに躊躇せざるものなり。

生存の慾望は宗教の基礎なり

以上舉げ來りし五説に就て考ふるに、各々多少の眞理を含蓄するに相違なしと雖、或は狹隘なるが故に、或は皮相なるが故に、未だ以て宗教の基礎の満足なる説明とは云ふ可からず。故に予は此の狹隘と此の皮相とを避けんが爲めに、生存の慾望を以て宗教

の基礎なりと爲す。固より宗教は發達進化するものなれば、今日の宗教は昔日の宗教に非ず。人と共に變じ世と共に異なるは宗教の常なれども、何の時代に於ても宗教が幸福を全ふせんとの人の慾望を基礎となすと云ふ事は、同一徹にして野蠻の昔時に於ても文明の今日に於ても毫も異なる所無し。唯異なるは幸福の性質のみ、幸福に對する慾望の品位のみ。故に人が此の天地の間千變萬化の現象の中に處して、最高最大の快樂を享けんと欲し又其幸福を全ふせんを欲する慾望を以て、宗教の基礎なりと論ずるは實に當然の事ならずや。而して此の説が他の説に優りて、如何に廣濶にして又た如何に満足なるやに就ては左に之を一言せざるべからず。

人が其の慾望を満足せしめ又高尚ならしむるに當りては、勢ひ智力の助けを借らざるべからず。又人は如何に智力の進歩を望むも、之が刺戟物たる慾望徹りせば、智力は決して進むこと能はざるべし。智力は恰も提燈の如く、慾望は恰も道を行く人の如し。進むべき道を開き且つ之を照すは、智力の働きなれども、進んで其の道を進み其の目的に向つて進行するは慾望たるなり。予は前節に於て宗教の基礎は、人が其幸福

を全ふせんと欲する慾望心に在りと云へり。是れ人は宗教無くして決して真正の満足に達し得べきものに非ざればなり。宗教とは神と人との關係の謂ひにして、神は天地の現象に依りて人に現はれ、人は此の神と其働きとに對して畏懼と尊敬と歎賞との念を感ず。宗教は人類を教育して、其の達し得べき完全最高の地位に達せしめ、其の幸福を全ふせしむるものなれば、人は宗教に依らずしては決して其存在の目的を全ふし得べきものにあらず。人が其目的其幸福を全ふせんとするに當りては、人智の進歩を必要とす。人智の進歩するに従ひ、天地萬有に關する既知(The Known)の範圍は比較的に愈々大になり、未知(The Unknown)の範圍は益々小さく爲るに相違無しと雖、既知の範圍が未知の範圍と相接續する境界線は愈々延長して、此點より見れば未知の常に増進すると明なり。此の未知の増進は儘かに吾人をして萬有の本體たるもの、洪大無邊なるを知らしむ。又既知の部分に就きて之を考ふるに、萬有の現象は外見甚だ其複雑なるにも拘はらず、内實は眞に能く整頓せられ、一定の法則に従ひて一定の目的に向つて進行しつゝあるなり。吾人之を見て實に賞賛に堪へざるものあり。此の二者

は、常に吾人をして萬有の本體を尊び、其智と力の洪大なるに感服せしむるものなり。又人の慾望の愈々上進するに従つて益々道義の觀念は明白になり、隨つて人々善の爲すべく惡の爲す可からざるを感じ、高尚なる品性を造くる事が人生の目的なることを確信するに至る。是れ一方に於ては、人心を支配する道德法の存在と其の目的を發表するものにして、之と同時に他の一方に於ては、此の道德的立法者の存在と其の性質を明白ならしむるものにして、人をして自ら此の立法者を尊敬し其徳を贊美せしむるものなり。

斯くの如く見來れば、宗教の基礎は幸福を全ふせんとするの慾望に在ること明白なるべけれども、又或る意味に於ては之を智識の上に在りと云ふを得べく、又或る意味に於ては意思の上に在りと云ふを得べし。單に知ると云ふ事のみは宗教にもあらず又宗教の基礎にもあらざるべきも、智が人生の幸福を全ふするに必要な以上は、又智に依りて吾人は神の智と其の力を知る以上は、即ち萬有は吾人を神に導く教導者なることを知り得る以上は、智は儘に宗教の基礎、少くとも其一部分、なりと云ふを得べ

し。斯くの如き宗教の基礎は決して學術の進歩を恐るゝものに非ず、却つて之を望み又之を促すものたるなり。如何に良心の命令有ればとて、吾人は其れのみにては決して道義的性質を有する神の存在を知り、又之に事へざる可からざることを知り得るものには非ず。されども此の良心の命令には慥かに一定の目的ありて、常に吾人の教導者と爲り、吾人をして高尚真正なる幸福に向つて進行せしむる以上は、吾人は此の命令を與へたる神の徳と其目的とを解して、自ら之を尊拜するに至る。されば此の良心の命令は此の意味に於て、慥かに宗教の基礎たるを得べし。

斯くの如く宗教の基礎は常に人が幸福を全ふせんと欲する慾望に在りて、吾人の智識も之が爲めに働き、意思も亦之が爲めに働く。未開時代の宗教の基礎も茲に在れば、今日の宗教の基礎も亦茲に在り。既に内には、幸福を求め又之に向つて進むべき命令を有する人心有り、又外には、此人心を刺戟して其發達を助長する萬有の現象有りとすれば、此の人心が此等の現象の刺戟を受け、其固有の目的に向つて進行するは、是れ實に人性の自然にして、宗教とは即ち此の人心が此の天地萬有の大原因、大本幹、

大立法者に對する調和、依頼、歸順、尊敬、崇拜に外ならざるなり。されば宗教の基礎は學術と矛盾するものに非ず、又道徳に反對するものにも非ず。云はば學術も道徳も皆宗教の中に包容せられて、共に人をして彼が達し得べき完全の域に達し眞正の幸福を享けしめんとするに外ならず。要するに、宗教とは人類全體の教育の謂にして其の目的は完全なる人間を養成するに在り。而して此の教育即ち宗教の存在の基礎は、人間が能く斯くの如き教育を受け得るに在るなり、斯くの如き教育を受けて始めて其の存在の目的即ち幸福を全ふし得るに在るなり。



第六章 宗教の進化

思想界の三大問題

現今泰西の思想界に於ける三大問題は、學術と道德との衝突、學術と宗教との衝突、及び道德と宗教との衝突の三者なるべし。人智の進歩するや、一方に於ては便利の増進すると共に、他の一方に於ては種々の罪惡の増進するものなることは争ふ可らざる事實なり。見よ學術の進歩すると共に、如何に窃盜術の進歩するやを。文明の進歩には善惡兩方面ありて、善事の進歩すると共に、惡事の進歩するは免かれざる處。恰も山の高きを望めば、其の山の高き程其の谷の深きを免かれざるが如けん。故に文明の進歩は之れをシーソーの遊戲に喩ふべし。一方に於て善智の發達を望み得べしとすれば、他の一方に於ては其れ丈け惡智の進歩を避くべからず。されば文明の最下點を見れば、罪惡不道德の極の如く思はるべけれども、又其の最高點を見れば快樂便利の極と思はるべし。社會に對して厭世觀を有する人は、即ちシーソーの下降せる一端をのみ

み見るものにして、社會の樂天觀を有する人は、即ちシーソーの騰上せる一端をのみ見るものゝ如し。社會は絶對的に厭世的なるにあらず、又樂天的なるにも非ず。社會は寧ろ進化の社會なり。既に進化すと云へば、惡しきものが漸く善化するの謂ひに外ならず。社會は果して善化しつゝあるや否や。人智即ち學術の進歩は、社會の罪惡を増加し不道德を培養するの媒介には非ざるべきや。是れ學術と道德との衝突する所以にして、泰西の思想家が孜孜兩者の調諧を試みんと欲する所以なり。之を現今泰西の思想界に於ける三大問題の一なりとす。

されども學術と道德との關係如何は、予が本章に於て研究せんとするにあらず。予は第二及び第三の大問題なる、學術と宗教の關係及び道德と宗教の關係等に関して、聊か卑見を陳せんと欲するなり。即ち學術と宗教が古來衝突して、宗教は或る時は學術の爲めに殄滅せられたるが如くなりしにも關せず、二者の共に生存して其の衝突は今日に至るまで尙ほ繼續せられつゝあるは、如何に之を説明すべきや。又道德と宗教とが、昔時より今日に至る迄、殆んど常に水火相容れざるが如く相衝突して、或る時

は宗教は道徳の爲めに排擠せられたるが如き観あるにも拘はらず、今日も尙ほ兩者が共に生存して種々の點に於て相衝突するは如何に之を説明すべきや。元來學術は宗教の撲滅者なりや、道徳は宗教の排擠者なりや、學術と道徳とは遂に宗教と水火相容れざるを免かれざるものなりや、宗教は遂に學術の爲めに撲滅せられ、又道徳の爲めに排擠し盡さるべきものなりや、學術と道徳とは遂に宗教と調和併存し得べからざるものなりや、宗教には學術及び道徳の範圍以外に在りて、宗教にのみ固有なる性質は之れ有らざるや、學術の進歩道徳の發達は、正さに宗教固有の本質を發揮せしむる方便には非ざるべきや、等の諸問題を宗教の進化てふ見地より研究せんと欲するもの、是れ本章の主意とする所なり。

宗教進化の事實

宗教の進化てふ事は、近時に於て始めて思想界に現はれ出でたるものにして、世の中には宗教を以て進化するものなりとは思惟せざる人も多かるべし。殊に人類を以て墮落せるものなりと信する人々に取りては、人類と共に宗教も亦墮落せるものにして進

化せしものなりとは思はれざるべし。然れども人類が野蠻蒙昧の状態より、文明開化の今日に進化し來りたることは、學術の進歩すると共に愈々明確になり來りつゝあるは争ふべからず。一浮一沈一昇一降は數の免かれざる所なれば、一國一社會の盛衰興亡と共に一時人類が或は進化し或は退化したることは之れあるべけれども、人類社會全體に就て古往今來の變遷を研究するときは、人類は退化せずして進化せし者なるは争ふべからざる事ならん。例へば或る點に於ては今日の文明は昔時希臘の文明に及ばざるとあるべきも、全體の上より云へば、何人か今日の文明が昔時の文明に優らずと云ふものあらんや。看よ近時に於ける學術の進歩、技藝の發達を。又看よ人間生活の程度と便利快樂の程度とが如何に上進し來れるやを。人類が果して下等動物より變遷し來れるや否やは、暫らく之を措き、或る國或る社會が蒙昧時代より進化して今日に至れるとは、例へば我日本國の歴史に徴しても疑ひなかるべし。又た嘗に一國一社會が斯く進化せるのみならず、此の進化を擴張して古今萬國に適用するも亦た不可なかるべし。即ち人類は嘗に一國に於て進化せるのみならず、出現の當時より今日に至る

まで多くの國土と時代を一貫して、野蠻より文明に進化し來れりと論じて毫も不都合あるを見ざるなり。

既に人類を以て斯く進化するものなりと云へば、人類社會の總ての現象は悉く皆進化し來れりと云ふに異ならず。政治も法律も族制も儀式も風俗も道德も學術も、皆是れ人類の進化と共に進化せしに相違なし。否寧ろ人類の進化とは此等の社會現象の進化を意味するに外ならざるなり。今宗教も亦た一種の社會現象なるが故に、社會現象を以て總て進化せるものなりとすれば、宗教の進化は既に社會進化の中に含著せられ居るに相違なし。總て他の社會現象を以て、曠昧簡易の状態より複雑文化の状態に進化したりとすれば、宗教のみ此の法則に外れ進化せずと云ふは、確乎たる證據あるにあらざれば、吾人の到底承認し得べき説には非ず。况んや古今萬國の歴史を緝けば、實に諸國の宗教が性質に於て上下甲乙の差異あるのみならず、時と共に變遷し一浮一沈の間を通して、下等なる宗教が漸く上等なる宗教と進化し來れる事實を發見するに於てをや。

宗教の進化が人類の進化と共に争ふべからざる歴史上の事實なることは斯の如く明白なれども、世人動もすれば宗教の進化に關して僻見を有し、成るべく宗教をして進化せざるものなるが如く考へ、且つ他人をして斯く考へしめんとするの傾向あるは何ぞや。殊に宗教を信ずる人の中に、宗教の進化てふ語に對して、不快の念を挾むもの少なからざるは、抑も如何なる理由に基づくものなるべきや。是れ他なし、宗教は人々の信仰に基づくものなるが故に、若し宗教の變遷を事實なりとせば、宗教に對する人々の信仰に損害ありと考ふるが故にはあらざるべきや。宗教は人の安心立命に關係するものなり。故に人々が之を重んずるは自然のとなりとす。昔より人々が最も多くの財産を費やし又貴重なる生命を捧げて毫も惜む處なかりしは、即ち是れ宗教の爲にてありき。宗教程多くの人を殺し又多くの戦争を惹起せしものは之れあらず。是れ皆歸する所人々が宗教を何物よりも重んずるに因るものにして、宗教の勢力が如何に強く且つ大なるやを證明するものなり。斯く人々は宗教を重んずるが故に、其の重んずる所のもの即ち宗教の變化するを好まざるは自然の勢ひなるべし。殊に彼等が今日信

ずる處の宗教が野蠻曖昧なる宗教より進化せるものなりと思惟するを好まざるも亦自然の勢ひなるべし。寧ろ彼等の間には今日の宗教を以て、昔時より今日同様の状態にて存在し來りしものなりと思惟するを好むの傾向あり。變化は即ち其者に不易の價値なきを示すが如き觀あるが故に、従つて之れが信仰を妨害するの恐れあるべし。況んや今日の宗教が一度は下等なる宗教にてありしといふことを信ぜんとするに於てをや。

加之元來宗教なるものは社會諸般の現象の中にて最も保守的性質を帶ぶるものなることは歴史上又た實驗上何人も之を争はざるべし。何故に宗教は保守的なりや。第一に宗教の性質が綜合的なるとは、其の保守的なる一理由なるべし。古代に於ては社會諸般の現象一として宗教と直接の關係を有せざるはなし。古代の社會は宗教的なるが故に、即ち宗教を以て中心となすが故に、總ての現象は悉く宗教の肢體の如く、又侍婢の如く然り。當時に於ては宗教を離れて學問なく技藝なく又政治なかりき。斯く宗教は少なくとも古代の社會に於ては、綜合的の性質を有せしが故に、社會の他の現象が

總て進化せし後に非ざれば、宗教は進化すること能はざりき。是れ宗教は社會の全體に關係するが故に、部分の總てが進化したる後に非ざれば、全體たる己れは進化すること能はざるなり。又た第二に宗教が習慣的なることは、其の保守的なる他の理由なるべし。元來人は自然に習慣を重んずるものにて、吾人の生涯の大部分は祖先より遺傳し來れる習慣を繼續遵奉するに過ぎず。殊に宗教の信仰は習慣に基くを多しとするものなれば、自ら變遷すること少かるべし。世人の多數が宗教を信ずるは、別に之を信ずるの理由を發見して後に信ずるにあらずして、祖先傳來なるが故に之を信ずるに止まるなり。此は我國の佛教徒の間に於て然るのみならず、歐米基督教徒の間に於ても多數は皆自然なり。斯くの如くして宗教の進化は其の綜合的なるも其の習慣的なるもに妨遏せられ、従つて宗教は社會現象中最も保守的なるの實を呈するに至れりと思はる。

世人が宗教の進化を好むとも好まざるも、宗教は社會と共に又た人類と共に進化し來りしなり。タトへ其の進化の速力は他の社會現象進化の速力よりも緩慢なるにもせ

よ、宗教は進化して下等なる天然物崇拜より高尚なる一神崇拜に達せしに相違無し。吾人は宗教の進化を論ずるに當り、勢ひ先づ人類の進化を論ずるの必要を感ずるなり。即ち何故に宗教は進化するものなりやを研究するに當りては、先づ何故に人類は進化するものなりやを研究せざるべからずと思惟す。

人類の進化と智情相互開發律

人が下等動物と相異なる所以は、何れの點に存するや、學者の間に隨分議論の存する處なるべく、又た今日の處に於ては到底満足なる解釋を得ると難かるべし。動物は果して種類に於て人類と相異なるや、或は兩者の區別は單に程度の問題のみなりや、動物は果して世人の考ふるが如く道理を辨へざるものなりや、道理の有無が人と下等動物との差別なりや、將た又た動物も多少の道理を有すれども、其の道理が未だ人の如くに發達せざるものなりや、要するに動物に關する智識が未だ満足に進歩せざる今日に於て、人と動物の區別を臆斷的に論定せんは頗る不都合なりと云はざるべからず。故に余は理論上より兩者の區別を臆斷するを止めて、争ふべからざる事實に就き、兩

者の間に存する明白なる差別を擧げんとす。

下等動物が人類よりも早く地球上に現はれ出でたることは、地質學上又生物學上明確なる事實なり。タトへ進化の法則は下等動物の間に行はれたるに相違なく、彼等も亦時と共に進化せしに相違なしとするも、今日の處に於て考ふれば、人よりも以前に地球上に出現したる動物は、動物に後れて出現したる人類の如く、速かに進化し得ざりしは、蓋し争ふべきにあらざらん。固より或動物の本能は、今日に於ても其の巧妙人智の上に出づるものあらん。然れども本能には殆んど進化あること無し。若し假りに進化ありとするも、其は殆んど識別し難きが如く緩慢なり。例へば今時の蜘蛛も昔時の蜘蛛も、網を張るの術に於て甚しき巧拙は之れあらざるべしと思はる。之に反して人類は、假りに動物より進化し來りしとするも、又其の智識は最初に於ては或る動物に劣りたりとするも、今日に於て人孰れか人類の進化が動物の進化に優ること萬々なるを承認せざらん。見よ近代に於ける學術上技藝上人類が爲せる長足の進歩を。何故に人は動物に優りて斯く進歩し得るや。是れ又人と動物との心的作用の比較的研

究に渉るべければ、臆断的に之を論定すべからずと雖、余を以て之を見れば、此の説
明は左の如くにはあらざるべきかと思はる。

人の智と情とは、動物の智と情とに異りて、其の進化の速力甚だ迅速なるを得るのみ
ならず、人の智と情との間には施動受動の関係ありて、智は情の進歩を促かし、情は
智の發達を促かすもの如し。余は之を稱して智情相互開發律と云はん。

元來動物は肉慾の爲めに生存するものなるが、其の肉慾は食慾、雌雄慾、睡眠慾の三
つなり。而して此等の肉慾の性質を考ふるに、(一) 此等は皆な直接に肉體に關係あり、
(二) 踰ゆべからざる一定の限りあり、(三) 其の起るや間歇的なり。此等の三性質に於
て、肉慾は動物に於ても又た人類に於ても毫も差違あることなし。サレド此等の肉慾
を滿すに當りて人類が動物より異なる所は、動物は之を滿すの機會あらば、其の定限
に達するまでは、兎も角も直接に之を滿さざれば止む能はざるものなれども、人類は
現在の事の外に、將來を考ふるの力あるが故に、動物の如くに現在直接の満足にのみ
注目せず、將來間接の満足を望んで喜び得るものなり。人類が此の將來てふ觀念を有

する迄には、非常に長き經驗即ち辛苦を要せしなるべし。人類が一たび此の「將來を
考ふる」と云ふ一大發明を爲すに至り、初めて肉慾は變じて慾望の性質を帯び得るに
至りしならん。タトヘバ初めは五箇の椰子を得て、一時に之を食ひ盡せしも、今は後
に椰子を見出し能はざることあらんを恐れて、三個を食ひ二個を貯蓄するを得るに至
らん。即ち將來を望んで現在の肉慾を制し得るに至る。一たび將來の觀念の生じ来る
や、從つて貯蓄の觀念を生ずべく、從つて所有即ち財産の觀念を生じ得るに至らん。
斯くして初めて直接なる肉慾は間接なる慾望と變ずるを得るなり。

肉慾を變じて慾望とならしむるは、重もに將來を考ふると云ふことに在りて存するが
故に、此は智の働きに相違なし。斯くして一たび慾望の心中に生じ来るや、此の慾望
は經驗の重なると共に、度量に於ても又性質に於ても、愈々増進するに至るなり。人
類が有せし最初の慾望は、所有即ち財産の慾望なりしならんも、之に續きて諸種の慾
望を接して生じ來りしならん。曰く權力の慾望、曰く名譽の慾望、曰く宗教の慾望、
曰く智識の慾望、曰く道德の慾望、曰く美術の慾望等と、人智の進むに従ひ、慾望も

亦た漸く増進し來りしなるべし。是に於て乎、吾人は慾望が如何に肉慾と相異なるやを見る。曰く、第一に、肉慾は重もに肉體に屬すれども、慾望は重もに心意に屬す。第二に曰く、肉慾は其の定限を越ゆれば自ら消滅するの性質を有すれども、慾望の満足には此種の定限なし。第三に曰く、肉慾は間歇的に起り來れども、慾望は常に存在し又た常に將來に關係す。慾望の性質斯の如くなるが故に、吾人は慾望に於て情と智とが共に働きつゝあるを見得べし。肉慾に於ては智の働きは必要ならざれども、慾望に於ては智の働きあるが爲めに、情は能く現在を離れて遠く將來に延長するを得るなり。即ち能く人は今の樂を後に譲りて、長く其の間を樂しむとを得るなり。既に屢々云へるが如く、慾望は音に其の量に於て定限なきのみならず、經驗の積もると共に、人の慾望は漸く下等なるより高尚なるに上進するを常とす。タトへば音樂を好む人が、音に一度よりも二度一時間よりも二時間之を聽かんと欲するのみならず、初めは悪しき音樂をも之を喜ぶべきも、遂には高尚なる音樂にあらざれば満足する能はざるに至るが如し。此は唯だ音樂に就て云へるなれども、何れの慾望も亦皆悉く然

り、斯く人が度量と性質との兩方に於て、能ふだけ多量なる又た高尚なる快樂を得んと欲するを得るは、是れ正さに情の働きにして、又人の情が動物の情と同じからざる所以なり。故に吾人の慾望は下等動物の有し得ずして、人類のみ之を有し得るものなることを忘るべからず。又肉慾を慾望に進化せしむるは、情に對する智の働きなることを忘るべからず。是に於て乎下等動物は肉慾の動物と稱すべく、人類は或は慾望の動物と稱し得可きの道理、自ら明白になれりと云ふべし。

熟ら文明なるもの、性質を考ふるに、一方よりは之を以て人の慾望の度量上及び性質上の發達に外ならずと云ふを得べく、又他の一方よりは文明なるものは總て此等の慾望を満足せしむる方法の増進に外ならずと云ふを得べし。凡て此等の慾望をして能く満足せしめ得るは、是れ即ち智の働にして、人智の進歩は能く此等の方法を發見し得るものなり。故に此點より考ふれば人智の進歩は凡ての慾望を満足せしめ得る方法の増進に異ならず。慾望は増進して之を満たす方法の發達を促がし、智識は慾望を満たすの方法を提出して愈々慾望の膨脹を促がす。斯くの如く智の發達は情の發達を促が

し、情の發達は智の發達を促がす。人が進化するは慾望に迫まられて然るなり。慾望に膨脹的性質あるが爲めに、人は常に此の膨脹的なる慾望を満足せしむるに足るの法を研究せざるを得ず。従つて満足せしむれば従つて膨脹するが故に、人智は日月と共に益々進歩せざるを得ず。是に於て乎吾人は人類進化の原動力は其の慾望に外ならずと云ふなり。然れども如何に一方に於て慾望は人を驅て進化せしむる原動力なりとするも、之と共に他の一方に於て慾望を適當に満足せしむべき方法之あらざれば、人は永久遂に進化すると能はざらん。智は情に迫まられて發達すれども、又情を導きて能く其の目的に達せしむるものなれば、此の點より考ふれば、智は情の發達を促がすものと云はざる可からず。即ち智は膨脹的なる慾望をして其の目的に達せしめ、且つ愈々膨脹し得せしむるものなりと云はざる可からず。

元來最も進化せる人とは最も膨脹せる慾望を有する人のとなり。慾望の満足とは、慾望が其の目的即ち外界の對象と適合するの謂ひなり。外界の對象とは、人間の生息する地球を始めとして、其の境遇の總ての現象を謂ふなり。全軀慾望には能く人を驅る

の力あれども、人を導く力なし。人を進化せしむるの原動力なれども、其の教導者にはあらず。慾望をして外界の事情と相適合せしむるものは、是れ正さに智の動にして、智が人類進化の教導者たる所以なり。之を譬ふれば、慾望は蒸氣力の如く、智識は軌道の如し。人を進化せしむるには、慾望が原動力となりて、後より之を驅り進むるを要すると同時に、智識が教導者となりて、前より之を誘ひ行くの必要あり。再び之を譬ふれば、慾望は、恰かも譬者の如し。歩むべき力はあれども、行くべき所を知らず。智識は恰も跛者の如し。行くべき所は之を見得れども、自ら之に向つて進行するの力なし。二力相須つて後ち始めて、人は其の目的に到達するを得べきなり。是れ余が人類の進化を以て智情相互開發律に基づくと爲す所以なり。

人の智と情とが互に原因となり又互に結果となりて、人類の進化を促がし來りたる次第は、略ぼ右に陳述するが如し。若し人類を以て實際上動物に優りて進化せしものなりとすれば、人類の進化して動物の進化せざる根本的原因は如何なるにせよ、人類の進化は智情相互開發律に従ふものなること、右に陳述せるが如きには非ざるべきや。

余が斯く宗教の進化を論ずるに先ちて、人類の進化を論せしは、一には、進化が宗教界のみにあらず、社會の他の現象の間にも亦一般に行はるゝものなることを示めさんが爲めなり。又今一には、人類の進化を研究し置かば、宗教の進化を研究するに當りて種々便益あるべしと信ずればなり。乞ふ今より進んで、宗教が如何にして進化せしや、又宗教の進化とは如何なるとなりや、等の諸問題を論究せしめよ。又進んで學術と道德との二者が宗教の進化に如何なる關係ありや、又如何にして學術と宗教と又道德と宗教とを調諧せしめ得るやを研究せしめよ。

宗教の欲望

元來人は下等動物より進化し來りたるにせよ、或は然らざるにせよ、曖昧野蠻の域より進んで文明開化の域に達したりと云ふとは、少しく目を今日の學術の進歩に注ぐものが疑はざる處なるべし。抑も人の此の進化は如何にして生じ來りしものなりや。一方より考ふれば、境遇の感化によるもの、如く思はるれども、又た他の一方より考ふれば、人の進化は正さに其の欲望の膨脹に原由せずんばならず。此の欲望は常に度量に於て増加するのみならず、種類に於ても亦た上進するの性質を有するものなり。人の進化せざる時代は、即ち欲望の度の最も低く且つ其の質の最も賤しき時代なり。又共に、人は其の欲望を増進するものなれば、欲望の多少と貴賤とは以て人の進化の程度を測量するに足るべし。

原始時代に於ては、人の欲望は僅に肉慾に止まり、従つて人と下等動物との區別は殆んど見出し難きが如くなりしならん。漸く人智の進むと共に將來てふ觀念自ら人心に浮び出で、初めて肉慾は變じて慾望となり、隨ふて所有の慾望即ち財産の念を生ぜしものと思はる。斯くして人と下等動物の差異は著しく爲り來りしものならん。當時の人間は利己私慾の情強く愛他謙讓の念乏しかりしが故に、人々皆な己れの事のみを考へて他人の利益を考ふるに遠なかりしなるべし。又物を己れの所有となさんと欲し且つ其の所有物を増さんと欲する慾望強かりしと同時に、權力の慾望即ち他人を己れ

の手足若しくは器械の如く用ひて我儘勝手を働かんとするの慾望も亦、甚だ盛なりしものと思はる。之れ見易き事なれば別に喋々を要せざるべし。加之他人を壓制して権柄を擅にすると共に、他人より譽められんとの慾望即ち名譽の慾望は生じ來りしならん。此の名譽の慾望は或る程度に於ては禽獸の間にも亦存在するものにして、野蠻人の間には殊に甚だ熾なるものなり。見よ彼等が非常なる苦痛を忍んで五身に文身を施すを。是れ他人より賤しめられざらん爲め、且つ他人より譽められんが爲めなるに外ならざるにあらずや。

此等の種々の慾望、即ち肉體に屬する種々の慾は勿論、所有の慾望、權力の慾望、名譽の慾望等は、野蠻人社會に於ても、又原始時代の人間社會に於ても、甚だ盛なるものなりしと思はる。同時に此等の慾望と共に甚だ強かりしは宗教の慾望なりしならん。原人は曾て宗教を有せざる時代ありしや否や、今日に於て之を確定すること能はず。此の問題を決する前には、先づ宗教とは果して如何なるものなりや、原人の有せし宗教と今日の宗教との間には如何なる差別ありや、等の問題をも研究するの必要あるべし。

じ。されども極めて廣き意味に於ては原人の間にも早くより宗教は存在せしならん。否な、嘗に存在せしのみならず、甚だ勢力ありしならん。既に人類が所有の慾望、權力の慾望、又名譽の慾望等を有し得るが如きまでに進化して、下等動物との差別甚しくなりし時代に於ては、宗教は能く彼等の間に存在するを得しや決して疑あるべからず。固より今日の文明人が有する如き宗教は之れ有らざりしに相違あらざれども、或種の宗教は彼等の間に存在せしに相違なし。然らば太古の宗教は果して如何なる性質のものにして、又如何に廣大なる勢力を有せしものなるべきや。

予は太古の人類が宗教を有せしとを信ずると前に云へるが如し。而して斯く信ずるは、當時の人類にも亦た宗教の慾望なるもの存在せしとを信ずればなり。否な、予は當時の人類が宗教に對する慾望の甚だ強盛なりしことを信ずるものなるが故なり。當時の宗教は今日より之を見れば迷信の極とも稱すべきものなりしに相違あらざれども、當時人智の進まざる時代に於ては、斯くの如き迷信的宗教の外に、他の宗教は存在し得べきものにあらず。今日より見て如何に迷信の如くなるも、當時に於ては何人も

之を以て迷信なりとは思はざりしなり。

當時の人類に取りては萬有の現象の中總て大なる、著しき、怪しき、力ある、異常なる現象は、總て恐ろしかりしに相違なし。而して此の恐怖は實に當時の宗教の一大要素を形造くるものなり。或は奇獸怪木を恐れ、或は暴風驟雨を怖れ、或は電光雷聲を恐れ、或は流星彗星を恐るゝ等を始めとして、總て怪しく恐ろしき現象は彼等の心に恐怖の念を惹起せしめしに相違なし。

さて此の恐怖の念は太古の宗教の一大要素を形造りしに相違なしと雖も、當時に於ても恐怖の念のみは未だ以て宗教の全躰とは見るべからず。元來人は此等の場合に於ては、常に恐怖を催すのみならず、進んで己れ以上のものに依頼するの念を惹起するものなり。此の依頼の念は即ち太古の宗教の他の一大要素にして、恐怖の念と共に當時の宗教の主觀的の二大要素を形造るものなり。

恐ろしき境遇に逢はば、人は自ら己れ以上のもの、即ち彼が己れを能く此恐ろしき境遇より拯ひ出し得べしと信ずるものに依頼せんと欲するものなり。而して此依頼の念

は或は祈願となり或は供物となりて、行爲に顯はるゝを常とす。又依頼せらるゝものは、其の何物たるを問はず之に依頼する人より、能く己れの依頼を承諾し己れを保護救助する恵と力を有するものなりと信ぜらるゝを常とす。而して人は如何にして此の信仰を有するに至りしや。之れには必ず自然にして正當なる理由無かる可からず。天然の現象は時に恐ろしく又た有害なりと雖も、常には靜かにして聽はしく、有益にして恵み深く、能く人に衣食を給し、其の生存を助くるものなるが故に人は自ら天然を以て依頼するに足るものなりと信ずるに至りしならん。又實に彼等は之に依頼せざるを得ざるものなり。然るに人は斯く天然に依頼しつゝありながら、恐怖的有害的現象に遭遇するまでは、己れが斯く依頼しつゝありしことを知らず。只此等の現象に遭遇して始めて今日迄依頼しつゝありしとを悟り、又た同時に依頼するの必要を悟るものなり。故に予は恐怖心と依頼心とを以て太古の宗教の主觀的の二大要素とは云ふなり。

宗教進化の三時代

太古人智の開けざる時代に於ては、萬有には恐怖的有害的現象夥しき如く思はるゝ

ものなるが故に、随つて當時に於ては、宗教即ち恐怖の念より起れる依頼の念は、甚だ勢力を有するものなり。是れ生存と生存の幸福とは、正さに宗教と親密なる關係を有するものにして、宗教を離れて安心を得るの方法あらざるに因るなり。實に當時に於ては、宗教は所謂人の安心立命を司るものなり。宜なり、宗教が當時の社會に於て非常なる勢力を有し、社會萬般の現象一として、宗教の器具の如く又其の婢僕の如くならざるものなきや。

當時に於ては別に學術なるものあることなく、唯だ生存に關して必要なる日常の智識と前世より傳へ來れる多少の傳説習慣等ありしのみならん。又別に道德なるものあることなく、唯だ前世より傳へ來れる習慣儀式等のみ、當時の道德にてありしならん。而して此等の習慣と云ひ言傳と云ひ、皆悉く宗教を中心として其の制裁を受けざるものなく、宗教を離れて外に學問なく、又道德なかりしなり。人々の起居職業等に至るまでも、悉く宗教の支配を蒙らざるを得ざりしなり。是れ即ち宗教を社會の中心とせる時代即ち宗教專制時代にして、學問も技術も道德も皆之れ宗教の中に隠れて、

尙ほ未だ獨立の存在を有せざる時代なり。

然れども智識と道德とは永久に宗教の爲めに壓服せられて、其の婢僕たるを甘んずるものにあらず。早晚各々其の勢力を増加して、遂に獨立の地位に進み、随つて宗教と衝突を生ずるに至る。今其の次第を左に陳述せん。

人は宗教の慾望を有すると共に、又智識の慾望を有するものなり。而して此智識の慾望も亦た膨脹的性質を有するものなれば、智識の範圍は漸く擴張せられて遂には宗教の範圍を蠶食するに至る。太古の時代に於ては恐ろしきもの怪しきものは皆神として崇拜せられたるものなると、前に述べたるが如し。日月も風雨も電雷も動物植物も、奇にして恐ろしきは悉く崇拜せられ、各々其の恐ろしき怒りを止めて、平常の靜かなる状態に歸着せんとを求められたるなり。されども智識の慾望漸く進歩して、日月を初め今日まで人々が神として崇拜し來りし總ての天然の現象は、決して神には非ずして、單に自然の法則に基づきて存在し且つ變化する所謂自然的現象に過ぎざるものなりと明白になり來れば、遂に宗教と智識とは或種の軋轢を避け得ざるに至るべし。

今太陽崇拜の一例を以て之を示さん。抑も太陽崇拜は世界萬國の宗教に於て、最も著しく又最も肝要なる部分を占有するものにして、此等の宗教殆んど一として、嘗て或る形に於て太陽崇拜を有せざりしはなし。埃及、亞述、波斯、印度、希臘、白晝、墨其古、等は云ふ迄もなく、半開野蠻諸國の宗教殆んど一として此の崇拜を有せざるは無し。殊に我が日本國に於て、太陽崇拜が如何に昔より盛なりしやは天照大神の存在を以ても明に之を證し得べけん。天照大神は歴史上の人物なりしにせよ、或は單に太陽の人化に過ぎざるにせよ、何れにしても太陽崇拜の存在を證するに足ることは何人も之を疑はざるべし。今日に於てすら我が同胞の多數は、毎朝盥漱の後、東向拍手して太陽を禮拜するに非ずや。然るに泰西學術の我が國に入るや太陽は死したる一の天體に過ぎざれば、生ける吾人は決して之を崇拜すべきものに非ずとの思想、漸く一般人の認識する所とならんとす。是に於て乎、太陽崇拜は自ら之と衝突せざるを得ず。而して斯くの如き衝突は、嘗に太陽崇拜に於てのみならず、總ての天然崇拜、偶像崇拜、其他の中等なる宗教に於て、早晚必ず生ぜざるを得ざるものなり。

斯く宗教と學術の衝突するに當りて、若し宗教に於て學術を壓服するの權力あらば、宗教の専横は繼續し得らるべきも、遂に宗教は學術を壓服すること能はざるに至るなり。斯くして宗教専制時代は滅亡して、宗教學術衝突時代となるなり。是れ宗教進化の第二時代なり。

而して此の衝突は、何國に於ても暫時は繼續せらるゝを常とす。そは世間には學術の餘澤を禁らざる人々、或は固執頑迷にして新思想を受け容るゝと能はざる人々多ければ、學術社會より棄却せられたる宗教も、頑迷社會の間に於ては尙一時其の餘命を維持することを得べければなり。或は又宗教主任者に於ては、若し出來得べくんば、將さに倒れんとする宗教を如何にかして新思想と調諧せしめんと、種々彌縫策を講ずるとあるべければなり。されども一たび破綻を初めたる宗教と學術との間柄は、遂に一時の彌縫を以て能く永遠の平和を來すと能はざるなり。宗教が暴力を以て學術を破壊せずんば、學術は眞理の力に由り遂に己れに反對する宗教を破壊し去るに至るべし。之れ實に避け能はざる所にして、歴史に徴して明白なる事實なり。斯くの如くして宗

教學術衝突の時代は變じて、宗教破壊時代とならざるを得ず。是れ宗教進化の第三時代なり。

以上は宗教と學術との關係を論じたるものなるが、宗教と道德の關係に於ても亦然り。人は智識の慾望を有すると同時に又道德の慾望を有するものにして、此の道德の慾望も亦た智識の慾望の如くに漸く膨脹するの性質を有するものなり。太古の社會に於ては宗教上の習慣を離れて別に道德なるもの之れ有らざりしことは前に已に之を述べたり。之れ即ち道德に對する宗教專制時代にして道德が宗教の中に潜在する時代なり。されども早晚人智の開發し經驗の積もると共に、道德は自ら宗教と分離して獨立なる範圍を有するに至る。而して此の道德の範圍は愈膨脹するものなるが故に、遂には宗教の範圍に侵入して爲めに衝突を來すの已むを得ざるに至る。斯くして宗教道德衝突時代は到來するなり。宗教專制の時代に於ては道德なるもの未だ發生せざるか、或は發生するも極めて幼稚のものなるが故に、今日より見て猥褻不道德なるが如き事實をも、吾人は之れを自然時代即ち無道德若しくは未道德時代の事實として論せざるべからざるものなり。然れども宗教道德衝突の時代に至りては、既に道德は獨立の存在と獨立の範圍を有するに至れるものなれば、此の時代に於ては最早や無道德若しくは未道德を以て論じ得べきには非ず。若し宗教が徳性に背く教理若しくは儀式を多く有せんには、吾人は嚴に不道德を以て之を論せざるべからず。斯く不道德なる分子より成る宗教は、永く社會に存在し得べきものにはあらず。早晚必ず道德の爲めに攻撃せられて、遂に滅亡せざるを得ざるに至るべし。是れ即ち道德より來たる宗教破壊時代なり。

或種の學者は宗教を攻撃するに、常に其の不道德なるを以て根據と爲すものゝ如し。之れ實に理由の存することなり。太古時代は無道德若しくは未道德時代の事として措て之れを論ぜざるも、既に人々が善惡を辨へ道德の何ものたるを知りし時代に於ても亦、多くの猥褻不道德なる行爲は宗教の名を以て行はるゝものなれば、宗教は恰も不道德の眞窟の如く又た罪惡の隠れ家の如き觀を呈すると、古今内外の歴史に於て其の證據決して甚少にあらざるなり。海外は暫く措き、近くは我が國の過去の歴史を繕く

も明白に此等の證據を發見するを得べし。否過去は愚か、現に我國今日の社會に於ても亦、幾多の罪惡と不道德とは宗教的建築物の中に於て、而かも宗教主任者の間に於て、養はれ又行はれつゝあるを發見し得べし。地獄極樂を説きて愚夫愚婦を瞞着し、宗教を以て金錢を釣り出ださん爲めの方便の如く思惟する山師連あるに非ずや。極樂成佛は他方信心によりて得らるべきものなれば、吾人の行爲は如何に賤劣猥醜なるも成佛に關係なしとて、飲酒放蕩を事とする宗教主任者あるに非ずや。神聖なるべき宗教的建築物を以て、汚行賤業の巢窟となさんとするが如き淫祠なるものあるに非ずや。此等は著しき現象なるが、此の外に或は呪、或は祈禱、或は巫術等を業として、愚民を蠱惑するもの、至る處に有るに非ずや。加之或は大神、或は白狐、或は老狸等を始めとして、文明の世にあるまじき劣等なる崇拜物、至る處に流行するには非ずや。斯くの如き不道德なる宗教は道德の進歩すると共に、自ら衝突を免かれざるべく、又遂に道德の爲めに滅却せらるゝに相違無からん。斯くして宗教滅亡時代は來たるなり又來たらざるべからざるなり。

斯くの如く、宗教は一方に於ては智識と衝突して、遂に智識の爲めに滅亡せしめらるゝが如く、又他の一方に於ては道德と衝突して、道德の爲めに破壊せしめらるゝものゝ如し。第一に來たるは智識に對する衝突なるが、何處に於ても早晚必ず第二の衝突即ち道德に對する衝突の來たるを例とす。而して始めに智識との衝突が來たり、次ぎに道德との衝突が來たるは是れ自然の勢ひなりとす。そは道德の發達は智識の發達に比すれば甚だ緩慢なるものにして、智識の非常に發達せし社會に於ても猶ほ道德は甚だ幼稚なるを常とすればなり。又道德の發達は智識の發達して後に始めて望み得べきことにして、智識の發達したる後に於ても、其の影響は長日月を経るに非ざれば道德の發達に及ばざるものなればなり。故に初めに宗教と衝突するは智識にして、道德の衝突は其の後に於て起るなり。斯く時に前後の差異はあれども、智識も道德も、共に宗教と衝突せしものなり、衝突しつゝあるものなり、又衝突すべきものなり。此の衝突の結果として、宗教は其の進化の第三時代に至り、初めは智識の爲め後には道德の爲めに撲滅せらるゝものゝ如し。

學術と道德は宗教進化の双輪なり

古來より宗教が或は智識と或は道德と衝突せしと、決して其の數少きにあらず。少しく發達したる國又宗教に於ては、國として嘗て斯かる衝突を目撃せざりしはあらざるべく、宗教として斯かる衝突を實驗せざりしはあらざるべし。タトへば紀元前四世紀の頃に於て、希臘の宗教が如何に智識及び道德と衝突せしやを看よ。又第十八世紀に於て、基督教が如何に歐洲諸國に於て學術の上より且つ道德の上より攻撃を蒙りしやを見よ。斯く宗教を以て智識及び道德と衝突して、遂に破壊せざるを得ざるものなりと云へば、或人は問て云ふべし、果して宗教は破壊し盡されしや、今日の社會に於て宗教は、全く其の跡を絶ちしやと。答へて曰く、否、宗教の學術と道德とに對する衝突は、如何に數多く又た激烈なりしにも拘はらず、宗教は依然として今日の社會に生存し、學術道德と共に社會の大切なる要素を形造りつゝあるなり。さらば破壊せられしが如きは何ものなりしや。答へて曰く、學術の爲め又道德の爲めに破壊せられしは、正に是れ或る宗教のことにして、決して宗教其の者とはあらざるなり。或る

宗教の破壊は決して宗教全体の滅亡を意味するものにあらず。嚙味時代の宗教は開化時代に生存すると能はず、遂に智識の爲め道德の爲め撲滅せらるゝは自然のとなれども、こは唯だ嚙味時代の宗教の事を云へるのみ。嚙味時代の宗教が當に斯く消滅し去るべきものなると、何人に於ても異論あらざるべし。

さらば宗教其の者の將來は如何、宗教其の者も亦た遂に學術及び道德の爲めに驅逐し去らるべきや、破壊し去らるべきや。此の問題は頗る大切にして又面白き問題なれども、茲に詳論するの違わらざれば、予は唯だ左の二事を述べて満足せんと欲す。

第一、若し宗教其の者の性質が學術及び道德と衝突して、之れが爲めに宗教は遂に消滅し去るべきものならば、斯かる宗教の消滅は、別に悲しむには及ばざるとにして、云はゞ當に消滅すべきものが消滅すると云ふに過ぎざるべし。

第二、されども宗教は宗教にして學術にもあらず又た道德にもあらずとすれば、如何に智識と道德とは進歩するも、宗教には此等と衝突せずして此等の範圍以外に超然たる特異性 (Diferentia) あるにはあらざるべきや。若し然りとせば人の有する宗教の慾

望は智識の慾望及び道德の慾望の爲めに擠排せらるゝものにはあらざるべし。

宗教とは、智と力に於て共に有限なる人が、萬有の大本源宇宙の攝理者に對する嘆美尊敬従順に外ならざれば、人の有限なることゝ依頼者を要することゝが續く限りは、宗教は消滅せざるべし。唯人の智識と道德とが進むに従ひ、依頼せらるゝ者の性質漸く明白になり又た高尚になるが故に、之れに對する人の思想感情も亦た自ら上進せざるを得ざるのみ。佛國の有名なる一學者が「始めには神己れの像に肖せて人を造り、後には人已れの像に肖せて神を造る」と云へるが如く、人は各々己れの心に基づきて神を造り、而して自ら此の神に肖んとを務むるものなり。故に野蠻人の神は之を拜する野蠻人の如く猛惡なれども、人の進化すると共に其の神の性質も亦た進化するものなり。固より斯く人心内に形造られ人心と共に進化する神は、萬有の基礎宇宙の主宰たる神と同一にはあらざれども、人が崇拜する神は此の絶對的の神にはあらずして、人心に反射したる相對的の神ならざるはなし。神の性質は之を崇拜する人の性質と共に異なるにせよ、人は何れの國何れの時に於ても己れの神を崇拜せざれば満足し得る

ものにあらず。之れ元來人は有限的動物にして、神に依頼するの天性あればならん。

唯だ此の神は人の進化と共に常に進化して、甲の神が乙の神に非ざるが如く、今日の神は昔日の神にはあらざるの差あるのみ。斯く神の性質の進化すると共に、宗教の性質も亦た進化し來れり。そは宗教は神と人との關係にして人進化すれば神進化し、神進化すれば之に對する人の崇拜即ち宗教も亦た進化せざるを得ざるなり。

神の此の進化即ち宗教の此の進化は、如何にして今日まで進み來たりしや。將來に於ける宗教の存否は暫く之を措き、宗教が今日迄進化し來たりて、遂に今日の如き高尚なるものとなり來たりしを事實なりとすれば、宗教の進化は如何に之れを説明すべきや。或る宗教は時と共に、人と共に、或は國と共に消滅したれども、宗教其の者は常に消滅せざるのみならず、多くの宗教の消滅するによりて、却つて愈々進化して其の性質を改良し來れり。何ものが能く宗教其の者の進化を來たせしや、宗教をして野蠻の域より文明の域に進ましめし所以の原動力は何處にありや。若し果して多くの宗教の消滅が宗教其の者の進化に關係ありとすれば、宗教其の者をして進化せしめし原動

力は、此等多くの宗教の撲滅者其の者に於て、之れを發見し得べきにはあらずるべきや。

多くの宗教をして消滅せざるを得ざらしめたるものは、一には智識の進歩、二には道徳の發達の兩者に外ならず。智識も道徳も當時の宗教と衝突して之れを變更改良せんことを務むるものなり。即ち其の宗教の中にて學術道徳に違反したる分子を排除するか、或は之れを變化して衝突せざらしめんとするものなり。若し此の事にして成就すれば、宗教は消滅せずして返つて進化するを得べけれども、若し宗教に於て此の干渉を許容すると能はずんば、遂に其の宗教は道徳と學術との爲めに撲滅せられて、其の代りに或る新宗教の出現し來たるを常とす。

而して學術及び道徳と宗教との肝要なる衝突點は、常に神即ち崇拜物の性質如何に在りて存するが如し。蓋し崇拜物は宗教の中心にして、其の性質如何は其の宗教全體の性質如何に關係するものなればなり。されば此の神の性質を進化せしめ、隨つて宗教の性質を進化せしむるものは、即ち學術と道徳との二者に外ならず。故に或る宗教に

取りては生存の讐敵たる學術と道徳とは、宗教其の者より考ふれば、實に讐敵にあらずるのみならず、實に宗教進化の良友たるなり。否な、良友は愚か、學術と道徳とは恰も車の兩輪の如く、又鳥の双翼に似て、實に宗教をして能く進化し得べからしむるものなり。

斯く考へ來れば宗教と學術との關係、又宗教と道徳との關係は自ら明瞭なるべしと思はる、即ち今日まで水火相容れざるが如くなりしは、學術及び道徳と、宗教其の者との間柄にてはあらずして、單に或る宗教即ち學術に反し道徳に戻るが如き宗教と前二者との間柄にてありしのみ。道徳は宗教の排擠者には非ずして宗教の洗滌者たり。學術は宗教の撲滅者には非ずして宗教の改良者たるのみ。

宗教の將來

今日の宗教が將來に永續して生存すべきや否や。宗教の將來は如何。今日に於て世界の三大宗教と云へば、何人も指を回教、佛教、基督教の三者に屈するならんが、此等の三大宗教は將來に於ても世界に生存し得べきや。若し生存し得べしとすれば、今日

の有様にて其の儘生存し得べきや、或は多少の改良を要すべきものなりや。世間には今日の或る宗教を以て完全無缺なるが如く思惟し、將來に於ても其の儘にて存在し、秋毫も進化せず又た進化すべからざるものなるが如く思惟するもの少からず。されども若し人智を以て尙ほ進化し道徳を以て益々發達すべきものなりとすれば、如何なる宗教と雖も將來に於て多少の進化あるべきは自然の勢ひにして、又た進化したりとて別に驚くにも及ばざるべし。又世間には學術の進歩を以て宗教の生存に危険なるが如く考ふるものあれども、これは宗教の性質を解せず且つ宗教進化の法則を知らざるに原由するに過ぎず。若し吾人にして能く宗教進化の法則を研究し、宗教其の者の本領を會得せば、學術の進歩又道徳の發達は宗教の爲めには喜ぶべきことにして、少しも憂ふべきことには非ざるべし。

元來吾人は宗教を以て背理悖徳のものなりとは思惟せず、寧ろ宗教を以て本來合理的又た道徳的のものなりと思惟す。多くの迷信的宗教は社會が進化して、學術の開發し道徳の改進すると共に消滅すべし。されども此は單に迷信的宗教のことのみ、決して

宗教其の者のことにあらざるなり。ソハ元來人は宗教的動物たれば、如何に智識は増加し道徳は進化するも、人の宗教心は決して之れが爲め撲滅せらるゝものにあらずして、反つて兩者の發達に依りて、宗教心其の者も亦益々其の本質を發現すべきものなればなり。サレバ智識と道徳とは常に宗教の撲滅者にあらざるのみならず、實に其の開發者なりと云はざるべからず。ソハ人類は如何に進化するとも終に人類にして有限の範圍を脱する能はず、自らを神と等しくすること能はざるものなればなり。人の人たる性質が不變不朽なる間は、宗教も亦不變不朽なりと考へて毫も不可なきを信ずればなり。

學術の進歩は、此の廣大無邊なる宇宙は悉く一定の法則の支配する處にして、天地の間奚も不合理的現象なきと益々吾人に證明して餘す處なからんとす。サレバ此の宇宙は何處より出て來りしや。吾人は之を創造したるか。萬有の法則は學術の創設したるものなりや。曰く否、吾人人類は或る時代に於て自ら識らずして突然と此世に生れ出てたるものなるのみ。吾人は智に於ても力に於ても、甚だ限りありて、頭髮の一本

をだも或は白くし或は黒くすること能はざるものなり。吾人の壽命を寸陰だも伸長し得ざるものなり。奚んぞ能く一座埃をだも創造するを得んや。萬有の法則は吾人が單に之を發見するのみ決して創設したるものにはあらざるなり。天地の間に充滿する美と恵とに至つては、吾人は單に此の恵に沐浴するのみ、此の美を嘆賞するのみ。學術の進歩は、一方に於て萬有が法則と美麗と恩恵との萬有なることを證明すると同時に、他の一方に於ては吾人の存在が根本的に依賴的にして、吾人の力と智とは共に甚だしく有限なることを吾人に熟知せしめ、従つて萬有に大本源あることを認識せしめつゝあるなり。誰か學術は吾人をして非宗教的ならしむと云ふものぞ。

道德の進歩は、吾人々類をして出來得る丈け完全なる社會を組織するの必要を認識せしめつゝあるなり。人は社會を組織せざれば到底己れの幸福を全ふし得べきものにあらず。ソハ社會を組織せず協力分業せずして、人は決して文化に進むこと能はざるものなればなり。社會の成長し又發達する程、道德は自ら必要に逼られて増進するものなり。ソハ社會的道德増進せざれば、人類は社會を組織するも十分の幸福を享受する

こと能はざればなり。斯くして始めて他人の爲めに力を盡くすべし、己れの爲めは人の爲め人の爲めは己れの爲めなり、等の思想人心の間に勢力を増加し來るなり。斯くして社會道德の發達と共に著しく發達し來るは、道德的命令は絶對的なりとの觀念と、人類社會には道德的目的ありとの思想、是れなり。而して此等は共に吾人をして常に吾人以外の正義の力を萬有の間に求めしむるものなり。完全なる道德的理想を眼前に觀せしめ且つ之に向つて進行せしむるものなり、又絶對的なる道德的命令者に從順なるべきことを力めしむるものなり。

斯くの如くなれば、一方に於て、如何に智識が増加したればとて、又他の一方に於て、如何に道德が進歩したればとて、其れが爲めに宗教の消滅する心配は之れあらざるべく、將來と雖も宗教は宗教として存在するに相違なからん。ソハ宗教は決して智識の爲めに其の存在を併吞せらるゝの憂なく、又道德の爲めに其の領地を横領せらるゝの恐れあらざればなり。萬有界に充滿する智と能と美と恵とは、世の終はり迄人類の怪異し讚賞し感謝する處なるべく、又社會と人心とに現然たる眞理の勢力と正義の勝

利と仁徳の感化とは、何時迄も人類の敬畏し尊重し崇拜する處なるべし。是れ豈に宗教の將來ならざらんや。是れ豈に智識學術の爲めに撲滅せらるゝものならんや。ソハ吾人に宗教の慾望ありて、(一)物質界の統一者、(二)心靈界の立法者、(三)物質心靈兩界の調諧者たる神、即ち「大なる我」と交はるを欲するの性質ある限りは、宗教其の者は必ず永遠に生存すべきものなればなり。

宗教を以て斯くの如き進化の歴史を有するものなりとすれば、昔より今日に至るまでの世界萬國の異種異様な宗教は、宗教其の者が其の萌芽の時代より今日成熟の時代に至るまで、進化し來たれる多くの段階に過ぎざることを悟り得べし。若し總ての宗教が宗教其の者の過去の時代即ち進化の段階に過ぎざりしとすれば、世人は總ての宗教に對して皆に輕蔑せざるのみならず、進んで之を貴重するに至るべし。そは如何なる野蠻なる宗教と雖も、皆な是れ老成したる宗教の幼稚時代たるに外ならざればなり。或る人は下等なる宗教を以て總て取るに足らざるものなるが如く考ふれども、如何なる宗教も一度は眞實なりと信じられ、當時の人心に安寧を興へ、又た將來に於て出現

すべき進化せる宗教の準備を爲せしものなれば、吾人は決して今日の人心に適せざればとて之を、輕蔑することあるべからず。却つて虚心平氣に總ての宗教を研究して、

宗教の本領と宗教進化の法則とを發見すべきものなり。

タトへば宗教其の者は蛇の如く、多くの宗教は蛇の皮の如し。蛇は生長すると共に其の皮を脱せざるべからず。一たび之を脱すれば脱したる皮は、後日に於て更らに其の用なし。されども蛇が之を脱する迄、即ち次ぎの皮の生出するまでは、其の皮は蛇の爲めに必要缺くべからざるものなり。今日文明時代の人々が過去の宗教を以て總て偽りの如く又無益なりしが如く思惟するは、恰かも成長したる蛇が、其の脱ぎ來りし幾多の皮を無益なりしと考ふるに異ならず。誰れか其の愚を笑はざらんや。又今日に於て或る宗教家が己れの宗教を、其儘の姿にて將來に維持せんと欲するは、恰かも蛇が何時までも今日の皮を脱せずして、其中に居らんと欲するが如し。誰れか其の愚を笑はざらんや。恰も蛇が今日の皮を脱ぎて將來に成長するが如く、今日の宗教も亦た進化して將來の宗教とならざるべからず。吾人は決して成長すべき蛇と其の脱すべき多

くの皮とを混同すべからざるが如く、成長すべき宗教其の者と死すべき多くの宗教とを混同すべからず。蓋し宗教は今日まで進化し來りしものなれば將來に於ても亦た進化すべきものなればなり。

サレバ吾人は信ず、人が人として生活し、萬有が萬有として存在する間は、如何に學術は開け又た道徳は進むも、宗教は遂に消滅することあらざるべしと。そは道徳の進歩と學術の開發とは、決して人性を豹變せしむるものにあらず、又萬有を撲滅するものにあらず、此の二者は反つて吾人をして心物兩界の基礎即ち神の存在と其の性質とを明瞭ならしむるものなればなり。宗教とは實に此の神に對する人心の交通調和同化にあらずして何ぞや。されば學術の開發と道徳の進歩とは、決して宗教の仇敵にはあらずして反つて其の好伴侶たるなり。

將來の宗教 其の五資格

宗教の將來既に斯くの如しとすれば、吾人は今一步を進みて、さらば將來の宗教は如何なる宗教なりやと問はざるを得ず。されども此は甚だ廣大なる問題にして、宗教學

者の間に於てすら、未だ満足に解釋し得られざる處たり。試に多くの學者が與へたる宗教の定義を比較せば、吾人は必ず此等の定義が彼此相異するを見る。事情斯くの如くなるが故に、吾人は決して猥りに茲に宗教の定義を下さんとするものにあらず、又將來の宗教は云々の内容を有せざるべからずと詳細に其の箇條を斷定せんとするにもあらず。然れども吾人は既に宗教に將來ありと思惟する以上は、將來の宗教の性質に關して吾人の思想の梗概を開陳せんと欲するなり。

故に今茲に吾人の目的とする所は、決して將來の宗教に關して其の教理若しくは儀式等の詳細を論ぜんとするにはあらず。吾人の目的は單に將來の宗教は如何なる種類のものなるべきやに就き、其の性質の大體の範圍を定めんと欲するのみ。吾人の信する處によれば、將來の宗教は少くとも左の五つの資格を有せざるべからず。

(一) 將來の宗教は科學的ならざるべからず。——或種の人々は思へらく「學術は智識に屬し宗教は信仰に屬す。故に兩者の範圍は全然相同じからず。従つて宗教と學術とは、性質上決して抵觸すべきものにあらず、又學術は決して宗教を破壊し得べきもの

にあらず」と。如何にも或る意味に於ては宗教は信仰に屬するものならん。又宗教は其の本質に於て學術の爲めに破壊せらるゝものにはあざらん。されども過去と現在の事實は、宗教と學術とが屢々衝突したることと、多くの宗教が學術の爲めに破壊せられたることを證明す。或人は云はずや、歐洲に於ける過去千九百年の歴史は、基督教と科學との衝突史に外ならずと。是れ豈に獨り基督教のみのことならんや。孰れの宗教か能く科學と矛盾せずして今日に至れるものぞ。如何に宗教は信仰に屬するが故に學術に關係なしと云ふも、宗教の此の唯我獨尊は、遂に學術の爲めに試練批判せられざるを得ず。是に於て乎、兩者の抵觸は避くべからず。而して此の抵觸の結果を見るに宗教が科學の爲めに、或は打撃せられ或は撲滅せられざるは稀なり。

何が故に多數の宗教は斯くの如く、科學の爲めに攻撃せられ又損害を蒙るや。科學の專横なるが爲めか、抑も又宗教の迷謬なるが爲めか。吾人は實に科學の專横なるを怒らずして、寧ろ宗教の迷謬なるを憫む。そは科學の專横は是れ正さに今日の文明の存在する所以なればなり。何が故に多數の宗教は科學と衝突するや。宗教なるが故

か。否、吾人は宗教其の者を以て必ずしも科學と矛盾せざるべからざるものなりとは思惟せず、寧ろ宗教の寄生物たる迷謬こそ、科學の爲めに破壊せらるゝものなれと思惟す。若し宗教にして科學的ならざらんか、科學と衝突するは自然のことのみ。何の怪しむべきとか之あらん。科學は飽く迄迷謬的宗教を打撃し破壊して止まざるべし。是れ正さに科學の任務なればなり。されば將來の科學全盛時代の宗教たらんものは、其の教理に於ても又儀式に於ても、全然科學的又合理的ならざるべからず。吾人は科學的ならず、又合理的ならざる宗教を要せず。さればとて吾人は科學と宗教とを同一視するものにはあらず。吾人は云ふ宗教は科學的ならざるべからずと。されども之と同時に吾人は重ねて云ふ、宗教は宗教にして科學にあらず、又た科學の爲めに吞滅せらるゝものにあらずと。

(二)、將來の宗教は道德的ならざるべからず。——迷信と不道德は甚だ親密なる關係を有するものなり。故に迷信的宗教は其の教理に於ても其の儀式に於ても、不道德を以て充溢せられざるは殆んど稀なりとす。元來吾人は道德を以て進歩的のもの又習慣的

のものなりと信ず。故に野蠻時代の所謂道徳は、文明時代より之を見れば、甚だし
く不道徳なるに相違あらざるべし。同じく文明時代に於ても、此の國と彼の國との間
には道徳上大なる差異の存すること決して珍らしき事實にあらず。斯くの如く道徳は
比較的なり。何が故に時と處とに依りて道徳は斯くの如く相異なるや。是れ他なし、一
社會の道徳は、其の社會の風俗習慣に直接の關係を有するものなるに因る。社會は其
の進化程度の異なるに従ひ、多少其の風俗習慣を異にせざるを得ず。従つて所謂道徳も
亦多少異ならざるを得ざるなり。故に道徳の高下貴賤は職として、其の行はるゝ社會
の文明進化の程度如何によりて定まるものと思はる。

道徳に於て然り、宗教に於ては更らに甚だしきものあり。少數の所謂世界的若しくは
道徳的宗教を除けば、天下多數の宗教は自然的宗教にして、道徳的宗教にあらず、魔
術的宗教にして仁義的宗教にあらず。故に此等の諸宗教は凡て迷信的にして、又不道徳
的なり。されども其の間自ら多少の高下優劣なくんばあらず。而して此の高下優劣如何
は諸宗教の道徳思想によりて定まるものにして、又此の道徳思想は重もに各宗教が其

の存立する社會より得來れるものなりとす。されども宗教は決して常に其の存立する
社會の道徳の正當なる代表者にあらずして、反つて一宗教の實際的道徳は其の社會の
道徳よりも一層劣等なることあり。是れ主として宗教が何物よりも保守的性質を有す
るが故にして、云はゞ宗教は其の社會の今日の道徳を代表せずして、過去野蠻時代の
道徳を代表するの傾向を有するなり。試みに見よ、我國の神道佛教等の實際的道徳が、
如何に不道徳にして又た如何に時勢遅れなるやを。將來の宗教たらんものは最も開發
せる社會の道徳を代表するものならざるべからず。否、單に代表するのみならず、之
を助長誘導し得るものならざるべからず。

(三)、將來の宗教は哲學的ならざるべからず。——吾人が將來の宗教は哲學的ならざる
べからずと云ふ時は、世人或は吾人を目して宗教と哲學とを混同するもの、如く思は
ん。されども吾人は決して宗教と哲學とを混同するものにあらず。哲學は理論なり研
究なり間接なり。之に反して、宗教は實際なり感情なり直接なり。兩者共に關係する
處の問題は同一ならん。されども此の同一なる問題に對する態度に至りては、二者大

に區別のあるなり。人と神との關係如何を根本的に研究するは哲學なり。故に哲學は理論にして間接なり。然るに宗教は人と神との相互感應其の者に外ならざるが故に感情にして直接なり。此の區別を認むるが故に、吾人は必ずしも宗教家を哲學者なりとも云はざれば、又哲學者を宗教家なりとも云はず。吾人が將來の宗教は哲學的なるべしと云ふは、決して宗教は將來に於て變じて哲學となるべしとの意味にはあらず。唯將來の宗教たらんものは、決して哲學を忘却すべからず又哲學と矛盾すべからずとの意味に外ならざるのみ。

吾人は淺薄なる實驗論者が自ら哲學の何物たるを了解し得ずして、猥に之れを度外視し、否之を有害視するを見て、私かに憫然に堪えざるなり。又此等實驗論者が宗教の必要を説き新宗教の設立を喋々するを聞きて、實に彼等の自家撞着なるに驚かざるを得ざるなり。哲學果して人世に不必要なるか。若し不必要ならば、何が故に哲學は今迄斯く世人の注意を懸き來りしや、又發達し來りしや。人心は遂に萬有の根本的眞理に到達せずして満足し得べきものなりや。人の靈魂の起原は如何、物質の起原は如何、

物界と靈界との交渉は如何。智識論は如何、意匠論は如何、本體論は如何。宇宙の變遷は如何に之を説明すべきや、生物の進化は如何に之を説明すべきや、壯美の増加は如何に之を説明すべきや、眞理の發揚は如何に之を説明すべきや、正義の勝利は如何に之を説明すべきや。哲學は之を「科學の科學」なりと云ふも、又「原理の學問」なりと云ふも、兎に角人類は遂に哲學を度外視し不用視すべきにはあらず。若し哲學は不用なりと云ふ人あらば、斯く云ふ人は自ら哲學は不用なりと云ふ時、既に己れは私かに己れの偏僻なる哲學に依頼するものならずや。さらば將來の宗教は遂に哲學を忘却すべからざるは勿論、毫も之と矛盾するが如きとあるべからず。そは宗教は哲學と矛盾して安立し得べきものにあらず、又た哲學は宗教と伴はずして満足し得べきものにあらざればなり。

(四) 將來の宗教は世界的ならざるべからず。——世人稍もすれば云ふ、將來の宗教は國家主義ならざるべからずと。所謂國家主義とは如何なるものぞ。排外的孤立主義の謂なるか、將又自然的對等主義の謂なるか。若し排外的孤立主義の宗教を設立せんと

企圖するものあらば、吾人は絶對的に之に反對するものなり。(一)今日の如く交通と運搬の便利の増進したる時代に於ては、何事に於ても到底孤立主義は實行し得べきものにあらず。是れ自然に戻り大勢に反すればなり。若し又假りに斯く孤立し得べしと考ふるも、其の利益は果して損害を辨償するに足るべきや。(二)真理と正義とが一國一時のものならずして世界的なるが如く、宗教も亦其の根本的性質に於ては、世界的のものなるに相違なし。試みに宗教發達史を緝けば、國民的宗教が進化して世界的宗教となれる明證あるを見る。(三)如何にも各國必ず固有の國粹あるに相違なし。されども一國の國粹にのみ心酔して、外國の國粹を忘却するは、是れ極めて策の拙に識の狭きものにあらずや。寧ろ諸國の華を摘み粹を蒐むるに及ばざると遠からずや。斯くの如き理由あるが故に、吾人は飽くまで將來の宗教の必ず世界的なるべきを唱道して止まざるものなり。さればとて吾人は決して絶對的に國家主義の宗教に反對するものにはあらず。吾人の心は面の如く各々多少の差異あり。故に真理は一なり正義は一なりと云ふと雖も、之を各人の實際に訴ふれば、屢々判断の矛盾するとあり。壯も一な

り美も亦一なりと云ふと雖も、吾人は必ずしも嗜好に於て雅美に於て悉く一致するにあらざるなり。個人の間にて然り。國民の間にて亦然り。個人と個人とは互に相異れども、之を一國民として他の國民に比する時は、小異にして大同なること屢々之あり。個人の間にて特質を異にし長處を異にするが如く、國民の間にも特質と長處との相異あり。是れ即ち各國に固有の國粹ある所以にして、將來に於ても國民間に又彼等の栖息する國土間に、分業の實行され得べき所以ならん。斯くの如き國粹は決して排外的孤立主義によりて發揚され得べきものにあらず、反つて國土を開放し外國と對等の交通を爲して始めて發見せらるべきものなり。斯く開國的又自然的意味ならんには、吾人と雖も決して國家的宗教に反對するものにあらず、寧ろ其の必要を力言せんとするものなり。そは斯くの如き國家的宗教は、宗教が世界的となりて後始めて得らるべきものなればなり。故に吾人は云ふ、將來の宗教は世界的ならざるべからずと。(五)將來の宗教は理想的ならざるべからず。——人は進化の動物なり社會は進化の團體なり。真理は同一なれども智識は常に増加しつゝあるなり。壯美は不變なりと雖も

感情は常に發達しつゝあるなり。正義は不朽なりと雖も道德は常に向上しつゝあるなり。大にしては人類より小にしては個人に至る迄、肉體に於ても智識に於ても精神に於ても、殆んど日に新らたに又日に新らたならざるものはなし。人は理想的動物なりとの名言、實に吾人を欺かざるなり。人は昔も今も理想を有す。而して此の理想は常に膨脹して止まず何處に於て其の極點に達すべきや、吾人は實に之を知らざるなり。さらば將來の宗教は果して如何なるものなるべきや。必ずや改善的のものならざるべからず、發達的のものならざるべからず。社會的のものならざるべからず、又た個人的のものならざるべからず。實に理想的のものならざるべからず。

今少しく細かに之を云んには、(一)、將來の宗教は社會改善主義ならざるべからず。既に社會と云へば將來の宗教は單に未來永劫の救済を説いて其の能事終れりと爲すものなるべからず。必ずや現世よりの、否現世の救済を説かざるべからず。個人の靈魂を極樂に引導するのみを、若しくは天國の民たるに適當ならしむるのみを、目的とするにては、未だ充分なりと云ふべからず。靈魂のみならず、肉體をも救済するを要す。

未來の極樂を望むのみならず、現世を天國と變せしめざるべからず。又既に理想的と云ふ以上は、將來の宗教は決して厭世退隱主義なるべからず、無爲恬淡主義なるべからず。必ずや活動主義なるべし、樂世主義なるべし。絶望の宗教なるべからず、寂滅の宗教なるべからず。(二)、將來の宗教は個人改善主義ならざるべからず。將來の宗教が社會改善主義ならざるべからざるは、上に述ぶるが如し。されども社會改善主義と共に個人改善主義も亦同時に將來の宗教が有せざるべからざる資格たり。元來宗教と云へば吾人は直ちに未來のことを思ひ、又直ちに已れ一個の靈魂のことを思ふものなり。而して此は基督教國に於ても又佛教國に於ても等しく然り。是れ全く宗教の性質を誤解したるに基因せずんばならず。是に於てか反動は起り來れり。實驗論者を始め或る種の人々は以爲らく人の靈魂には未來の生命なければ、來世に關する宗教の必要なしと、又以爲らく個人は單に社會の爲に存在する埋め草に過ぎざれば、社會は貴く個人は左程貴からずと。されども吾人を以て之を見れば、此等は共に極端の說に過ぎず。如何にも社會には個人以外の存在あり、又目的あるに相違なし。故に此點より見

れば個人は社會の埋め草の如けん。されども個人にも亦社會以外の存在あり又た目的あるが故に、此點より考れば社會は個人の爲に存在すと見るを得べし。况んや個人的改善は直接に社會的改善に影響を有するに於てをや。又况んや個人の來世的生命が必ずしも否定し得べきものならざるに於てをや。故に吾人は云ふ、將來の宗教は、「公の生涯に」於ても、又「私の生涯」に於ても、個人を理想的に改善し得るものにあらざれば不可なりと。

我國將來の宗教は如何

將來の宗教が有すべき資格は少くとも右に論ずるが如し。而して以上は將來の宗教を全體に論じたるものなるが、今之を我國將來の宗教に適用して論ずれば、果して如何ぞや。我國將來の宗教は果して如何なる宗教なるべき。神道なるべき乎、佛教なるべき乎、儒道なるべき乎、基督教なるべき乎、抑も又或る種の人々が設立を企圖しつゝありと稱する一種の國家的新宗教なるべき乎。吾人は將來の我國に宗教の必要なるを信じて疑はず。されども此の宗教は果して何宗教なりや又如何なる宗教なるべきやに

就ては、今日に於ては單に以上擧げたる五ヶの資格を擧げて之に答ふる外なし。第一に曰く、我國將來の宗教は科學的ならざるべからず、第二に曰く、我國將來の宗教は道徳的ならざるべからず、第三に曰く、我國將來の宗教は哲學的ならざるべからず、第四に曰く、我國將來の宗教は世界的ならざるべからず、第五に曰く、我國將來の宗教は理想的ならざるべからずと、是れなり。要するに我國將來の宗教は、其の何教たるに論なく、吾人に最も圓滿高尚なる理想を懷抱せしめ得るものならざるべからず、個人として又國民として、人性の要求を完全に満足せしめ得るものならざるべからず、「公の生涯」に於ても又「私の生涯」に於ても吾人の理想に適合し且つ此の理想をして益々膨脹せしめ得るものならざるべからず。迷信的ならずして、合理的ならざるべからず。背徳的ならずして、仁義的ならざるべからず。皮相的ならずして奧妙的ならざるべからず。偏僻的ならずして、平等的ならざるべからず。厭世的ならずして理想的ならざるべからず。それは斯くの如き宗教を要求するは、決して單に我國のみにあらずして、是れ實に世界の大願なればなり。我國將來の宗教は忠君愛國的神道なるべき乎

平等寂滅的佛教なるべき乎。愛神將人的基督教たるべき乎。將亦他に待つべき乎。要するに、今日の我國は實に宗教に豊富なるのみならず、我國民は元來同化力に富み、古き材料の精華を蒐めて之に新らしき生命を與へ得るものなるが故に、我國將來の宗教たらんものは遂には世界將來の宗教となるべきものにはあらざる乎。

18/1/34
宗教研究 終

明治三十二年十二月十九日印刷
明治三十二年十二月廿一日發行

著者 岸本能武太

發行者 京橋區采女町二十四番地 福永文之助

印刷者 京橋區西紺屋町廿六七番地 高田乙三

發行所 京橋區采女町二十四番地 警醒社書店

印刷所 京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社 秀英舍



足立栗園君著

批判的日本佛教史

定價五十錢
郵税六錢

近時政教の相關を論ずる者多し。然も我佛
教史に暗きか故によく言の肯綮に中れる者
少し。日本は果して如何の宗教發達を遂げ
し、神佛兩道の渾融は如何にして行はれし、
而して教家は如何にして政教相資の實績を
擧げたりしや。之を知らんと欲せば實に佛
教の正史を觀るのみならず、又社會發達の
上より側面的觀察を佛教史上に下さざるべ
からず。本書は乃ち之が爲めに世に出でた
り。若し夫れ政治家教育家宗教家等苟くも
社會指導の任に當る者は須らく本書により
て我國宗教發達の一斑を究め、進んで刻下
急務の政教問題に論及せらるべし、乃ち聊
か斷論に於て誤謬なきを期すべけんか。請
ふ一本を購求して參考の材に供する處あれ
八濱督郎君編

比類宗 迷信の日本

定價廿五錢
郵税四錢

本書題して『迷信の日本』と謂ふと雖も、其

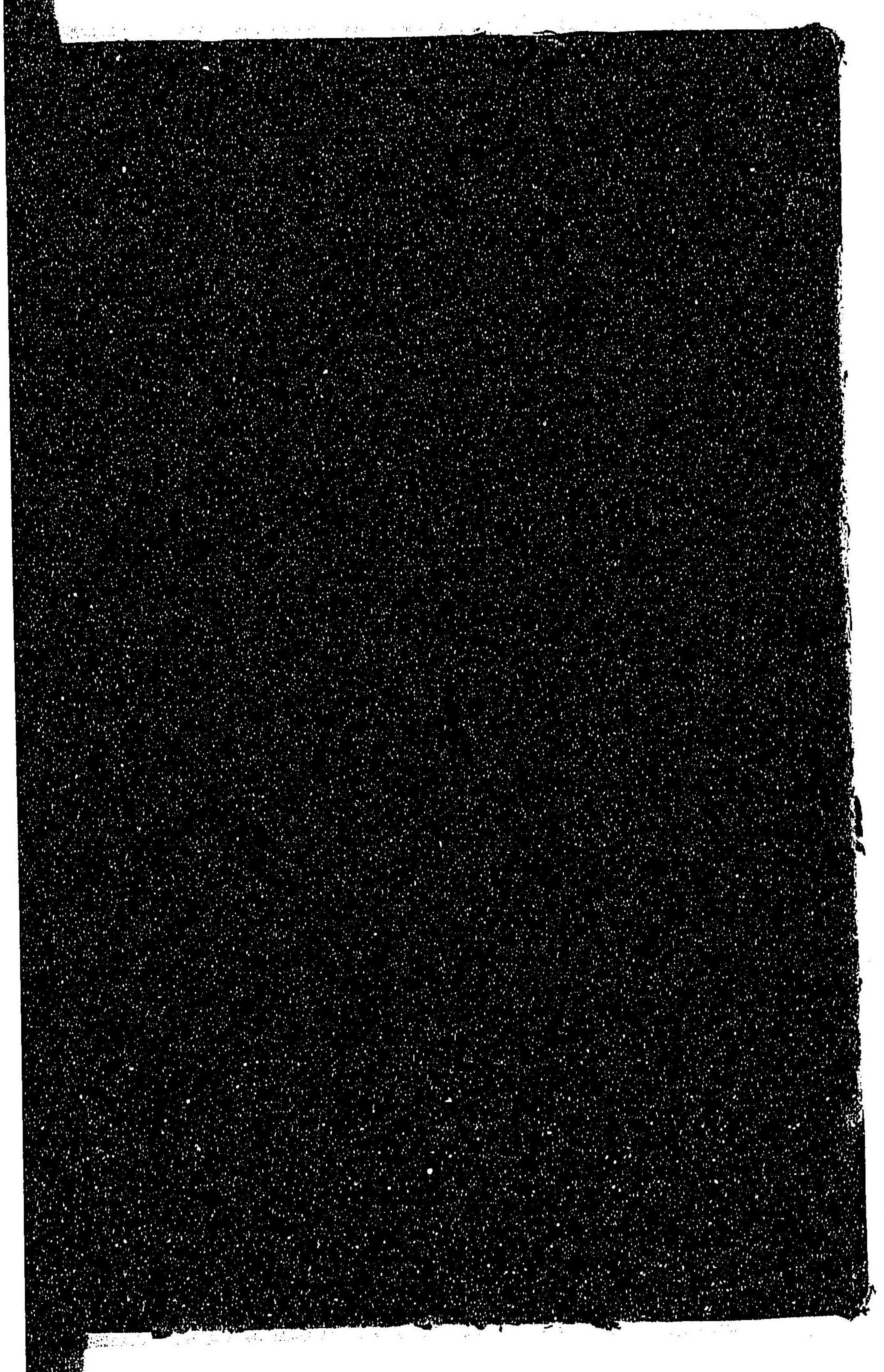
の實は我邦に於ける民間の信仰を論叙せる
もの、其の目次の梗概を示せば

◎一章總論 宗教の分類 ◎二章迷信 中央の迷信 洛陽の迷信 北國の迷信 阿伊ヌの迷信 ◎三章禁厭 ◎四章卜占 ◎五章俗傳 ◎附録

坪井博士の俗傳 全篇悉く實歴目睹の事實
の類を厭はずして 畿内には或奥羽には或中國には
南船北馬、或は 關東に鞍馬巡禮して親ら視察せし事實を蒐たる者 生
殖器崇拜、動植物崇拜、岩石崇拜、
天然崇拜、偶像崇拜 俗傳の如き秘密は、赤裸にして 比
厭、占卜、俗傳の如き秘密は、赤裸にして 比
較宗教學專攻の學者 マスター、オ
能武太士 姉崎正治 兩氏の協賛 一大論
文の寄送を乞ふて卷首に掲載しあれば、齒龍更に點睛の
妙を極むと謂はん乎、錦上更に花を飾ると云はん乎、
要するに本書の眞價は出梓の日を俟ち、敢て江湖の世評
に問はん。

發賣 東京々橋 區采女町 警醒社書店

85
96



85
96

Ⓜ

013610-000-5

85-96

宗教研究

岸本 能武太/著

M32

ABA-0079

